

詩而形集

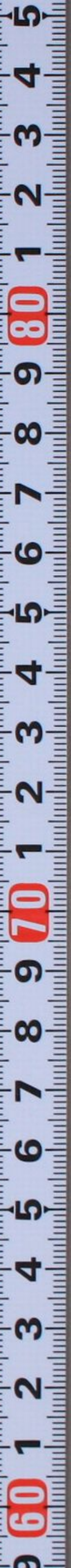
附錄	卷二十	卷十九	卷十八	卷十七	卷十六	卷十五	章
諸家發句 第唱句文章	祝辭 自序 跋	祭文 弔文	哀辭	傳 記二 字說 行狀	記一	頌 贊	

中村俊定文庫

文庫 18

482

3





俳諧而形集卷之十五

東都 解庵 皐月平砂 著



文章

頌

案山子頌



笠哉もて人の頭ふきぐへ。柱をまきく人乃御ふたふれ
らふ。軟魚まきく獨きて。稻葉少く風よかこふきつ。
ふ内りも汝りありも。あうううううう。又哀深し。さき
木偶の錦繡を飾る物と。弓矢の勢ひをますも。守
片まりし。よ備へを張れ。猪狼乃に。よたを。鷺鷥の

東許川行 而形集卷之十五 頌 一 五

たけきも。あせむるに思われのへし。近くハ一村の富を
助弟。遠くハ万民の命をのふ所。かゝるハ人乃巧き
よわ能く。用をたすも人よきも。大まかなら。此の
中も。もと代の西像をわびとす。桐油合羽のちりり
あり。又風十の用をたすも。冬田の必をある
るり。必長遠をすふことあり。し。

ちりり。ほよあしり。か。かし

餅徳頌并序

享保癸卯秋。冬。ひる。又。道をみる。とあり。劉氏の
酒徳の頌を讀む。よむ。て。文辞の妙ひを感ず。可

容みていつく。我もかし。氏頌を申して。このまゝ
酒餅問答を化教。予。安て。其。意。を。問。答。を
云。可。あ。も。も。れ。餅。なる。を。酒。餅。の。二。つ。よ。み
其。論。を。結。ぶ。に。秋。田。乃。秋。木。を。以。寸。此。木。や。取。て
樽。と。す。又。用。ひ。て。酒。餅。の。二。つ。よ。み
あ。ね。も。ち。り。是。徳。文。の。化。教。也。予。白。酒。徳。大。也。
あ。ん。ろ。餅。酒。す。か。う。守。徳。を。得。也。得。あ。徳。は
失。あり。一。得。一。失。各。志。り。一。徳。を。執。る。こと。ち。り。れ
我。も。餅。の。徳。を。奉。ん。志。お。て。老。杉。を。ゆ。ま。し。其
へ。か。ん。客。黙。して。去。ぬ。は。お。お。け。必。を。作。る。於。自

誇いといちん。女と人伯備。頭有と。異園の酒氣を
對するふたつ。きくちふわつ。この破者不投して。
大言乃口を塞うむとすう。終。

又序

古昔劉伯備酒造公若。但自分一人之機嫌。而
棒鱈、くま味、止乎。如何。尔毛者。可之。子細而。
君と當之。詞。古。おま捕世と之下戸。而。北捲。及
耶。往突印之本也。鼻。或人作酒餅。問答。而詰餅。食
若。止乎。且。予毛不恐。折首之。壯氣。如。綴餅。造。及
紙上之。論義。止。鼻。爰。在。司。道。恕。前。為。作。洞。房。語。園。

介。有謂酒造公若。今又對。此。題。為。又。坊。之。發。畢。因
刊。舊。文。之。誤。而。添。新。說。之。味。也。其。頌。曰

夫天地のめつとつ。宇架の神乃南ありめ有りて。
たねつもの豊よよのねた。人の命此根を所ちまでいね
とやこれをもとつ。あつ。我。さあれをよ。いへ。向。と。そ。新
用。故。し。く。や。ま。の。何。の。自由。を。か。む。へ。き。ふ。こ。め。と。八。日。と。乃
る。子。を。辨。ち。く。八。木。を。武。家。の。謎。文。な。り。たり。あ。は。れ。
中。よ。そ。類。を。同。つ。そ。品。を。美。し。て。糯。と。い。ふ。身。
一。種。あ。り。ハ。そ。ま。は。淫。ぞ。の。マ。ち。を。く。そ。用。の。ま。ま。さ。り。
も。ち。ち。れ。も。其。名。い。ひ。も。用。と。い。ひ。共。に。も。ち。く。也。

てとよふあゝん。扱人、工の如し。さきより。杵と臼との働き
 を待て。天成乃風味をあらち寸に。齋ツキテく。白の底より
 こころん。こころん。おひら。杵の先へあてん。こころん
 ちりりて。一動一静の函をりさぬれ。陰功の交り。け
 ろして。煉加減を人の和又志うん。おひら。けきをををの
 大かろ。や。の行幸にわり。ことなく。神又伎佛。供
 せら。棟とのち。年忌のち。け。花乃雪の
 およ。あ。人を遊ち。む。こと又多。朝茶乃粉
 の賑。晚の炒。物乃。あ。時の変化。又自在。ま
 ち。ある。辛甘の味。借。丹靑の。深。て

勢鄙に諸の名をあ。声あ。て旅人を。め。
 せ。ゆ。猿枕の。を。二。指。又。曲。を。さ。
 鞍上の。飢。を。密。ふ。や。ま。ゆ。ゆ。百里の。糧。あり
 こ。これ。を。む。む。を。ち。け。し。かく。け。の。ん。成。世。
 せ。あ。ひ。て。かり。を。物。に。こ。ま。り。皮。を。剥。て。栄。耀。若。の。心。
 形。も。又。之。し。記。き。跡。を。投。て。右。ろ。丸。へ。引。か。へ。も。
 心。乃。猿。の。む。さ。け。り。ま。あ。ら。ぬ。ま。又。悦。ち。き。を。ゆ。り。お
 あ。の。耐。ま。し。尻。も。の。名。乃。け。し。も。然。の。憂。を
 き。く。さ。し。に。耳。ぬ。さ。き。を。あ。つ。け。け。も。力。を
 抜。ふ。こ。も。あ。て。実。を。乃。清。め。か。る。へ。人の。親。乃

夏并川行 而形集卷十五 頌 日 三 少 歳

子をいましむるおも。かの赤園子のたまさるるより
爪もちれあへて子さ。いけ身も粉となることちすまこと。おし
ささるるはな。むきま。誠な良業の苦みありて。金くち
名のいさぎ。ちむむ。けけ物のみま。なれを。古今の
ま。人ありて。か。ふ。穀菜百片キレみ。隙を。んすれを。て。ま。ハ
物枝だけの串指。お。度。乃。名。を。あ。り。て。徳。負。ハ
人。よ。射。て。の。あ。そ。ひ。ち。ら。と。獨。居。を。あ。い。む。い。つ。り。も。
い。ま。な。の。あ。ま。地。あ。ま。さ。と。杉。は。く。は。む。く。の。友。さ。し。
く。ふ。さ。す。は。数。の。務。ふ。か。た。に。や。く。そ。乃。辨。悠。悠。り。て。ハ。
李白。一。斗。も。盧。仝。七。碗。も。道。又。通。す。か。を。了。と。せ。す。

いつし。の。睡。夢。の。境。よ。入。て。百。年。の。昔。を。さ。す。れ。て。ま。
ち。ん。ろ。沈。碎。お。款。手。は。和。む。お。む。る。う。む。う。の。房。宮
乃。下。流。ふ。い。の。如。弱。武。者。の。勤。め。く。ひ。ま。む。ち。り。め。て
下。戸。の。名。目。あ。り。て。又。あ。れ。一。人。の。奴。者。あ。り。て。糶。炊
の。櫃。ふ。ま。ぐ。り。焼。ケ。を。腰。お。押。あ。て。あ。も。い。う。そ。と。戸。は
張。負。な。む。お。り。り。し。て。今。ま。ま。に。や。も。す。れ。を
お。ら。る。中。の。ち。や。も。お。し。羅。お。り。て。その。道。の。あ。ら
さ。め。終。い。て。そ。よ。敷。く。法。法。を。お。り。て。醒。者。の。越。後
傳。へ。ん。の。餅。を。ち。ら。屋。の。も。を。あ。り。て。の。こ。さ。み。を
飽。て。く。さ。よ。り。や。ま。の。あ。ら。し。

魚膾頌

禮なる哉膾。うけ細きさといふこと。聖人の教ある
 より。代るは庖丁のま煉を事ひく。味ひは磯乃二物平
 但せぬへ。ワきくかの剡中の後。田舎料理をたのむ
 ず。鮎まは。すうに名出のかん。は。感。入。らん。ま。ら。お
 碎真。こ。か。か。へ。さ。撥。も。わ。く。め。た。や。そ。り。き。さ。す
 賀宴の始。ま。ま。わ。く。後。初。の。古。風。の。い。せ。さ。ま。や。お。さ。す。り
 大根の儘。を。煮。て。鱒。乃。と。ま。い。更。さ。を。も。む。ね。も。錫。も。又
 お。ふ。わ。ね。く。姑。を。後。の。う。こ。ひ。お。と。成。ぬ。は。ら。ま。ま。の。不。易
 ち。の。こ。も。け。の。流。け。は。は。ま。さ。つ。茶。會。の。佳。を。は。へ。へ。

他席姑殺をうけて。むろくに小刀の將老のより。ふ葵
 おろ。れ。ま。あ。ま。を。用。也。ね。時。加。へ。て。く。び。げ。な。て。吸。さ。る
 の。技。を。お。り。て。東。比。須。の。好。ま。お。り。小。持。お。お。り。と。色。

心太頌并序

ま。ま。の。も。を。る。を。そ。よ。れ。毎。ま。あ。つ。く。神。流。と。つ。
 塩。み。く。を。入。ぬ。磯。乃。草。た。の。ま。て。な。も。あ。き。人。み
 た。と。あ。の。ら。そ。れ。ま。ぬ。の。よ。く。な。む。き。ひ。だ。よ。よ。波。は
 及。し。く。ね。く。あ。つ。く。ま。物。よ。よ。み。ま。ま。ま。ぬ。や。ま。あ。く
 な。の。り。我。の。ら。み。ま。ま。か。み。の。い。つ。ま。の。の。ゆ。ま。は。り。て
 い。ま。ね。也。す。る。て。の。玉。の。称。美。を。得。て。より。刈。す。ら。あ

浦乃口ききも。控心ちきき半ふさちき。かぬがさらの
 少くかろぬまちるく。されたま藻もあらしみ。
 凝海藻ギョウソウとまつ糸つる物。本朝式ヨシもいし名りて。
 漢語抄カンゴショも大凝菜といひ。毎又古笛コルモ毛波モイとよよ
 ちるに俗よ心太の二字を用いて。古コ呂布ロフ止トとよそ
 いるより。順乃ふさよみぬ。今ころてんとて
 をやす也。季吟翁のやけもの。に職人シヨクジン及ツキの合を
 引く。わら心てんとよゆる。判の詞ハジメも。是らぶと城シロと
 わらく若の詞ニガハシちる由ユきと也。能ま心ぶとくといふ
 をて治ていと云と。又ころてんとし伝ツタへ成ナへり。

以上季吟説

能ある哥合カガの今本イマホンも。式シキら能のなりも。乃秋の
 友もすら。月ツキ又すま次ツギやわらひて。判ハジメ云。うら能は
 よのすららん。能とる半志ハジメより。能ていきく。能てち
 すと也。以上再板職人尽哥合はあまもも。能ていさ。能てい
 とか。わら。右板ミダ彩イロ本のたふいめあわら。古本コホンかか
 あり。も知へく。守モリ。いあもあし。ころてん。能て
 の詞ハジメ乃ハジメ轉マシき。らん。能。とも裏ウラ声コエのころてい。能
 き。ころて。あ。ら。て。い。や。も。て。人。や。も。及ツキ復ツキも。て。よ。へ。る
 中ナカハ。詞ハジメの用ヨウも。能。あ。ら。し。む。扱アけ。の。く。せ。く。と。も。や。
 三身サンミ翁ウの食シキ禮レイも。詞ハジメ能ノい。る。石花菜シキなり。ころて。

支那の海産乃いままにせしむ。さきこも二三寸あり。
 うらち珊瑚の如くにして。紅白の二色ありを我。かく
 おひはしめきる侍。さきも。ありは木の葉あるま。ちど
 誤謬をのり法を頒布す。此お好事の人共為
 平。夏産おの粒小歌。其辭よ、まぐ。

藻を体とし。凝を用。次菜類も入て世の交。アを
 同し。猪初をさるねく物の功。成あを付。昆布
 種俵のめて。さ例も何。こ。海苔。麻尾菜の憂。が
 中。も入。海索麩のぬを盗め。於期。海雲乃
 酒。る。所。い。あ。ら。む。より。き。く。松。葉。の。操。ありて。

遊魚とともに樂しめるを我。是やむ。の友と云る
 へく。ちね。ん。も。か。ち。ひ。た。ら。ん。の。き。ね。を。か。つ。き。次。歌
 海。を。と。控。の。塩。木。の。味。も。ひ。ろ。を。付。ま。ろ。う。一。人。ハ
 生。美。醋。の。り。く。味。を。あ。ら。う。あ。ま。け。は。即。座。の。設。あ。ら
 初。を。こ。お。せ。の。一。む。せ。お。甲。船。の。様。孫。を。契。り。
 都。お。の。不。致。お。ま。れ。い。ひ。む。一。民。部。省。小。貢。カ。れ
 一。の。こ。こ。盛。なる。江。戸。を。あ。ら。う。て。鮓。魚。肆。の
 役。を。ま。さ。む。ま。す。荒。和。布。格。の。る。も。せ。び。ま。す。で。あ。
 ま。ろ。ひ。ら。る。海。の。り。夏。産。一。き。を。あ。ら。う。の。ひ。ね。カ。
 乃。一。さ。く。ま。よ。こ。ね。さ。い。ま。ま。い。ま。は。東。西。小。の。い

豊川行 而形集卷十五 頌 八 三少哉

もくゆく。こねを湯に融トカ。水にあらせせ。一面より
 てやまをちりちり。みつけり玉の層に似てむき。突出
 ちんこへる切り。巧ふ造まるがあやけりを居て。銀河の
 九天より落るといひ。既ばあつねをふまはうせまく。
 京口乃濤ナめちめをちきくむ。邵碧油ナのあり。
 豆粉砂糖ナ和ナとき。風味、おのねむよつね。町の
 空ナきふきううそんそ。行客を休むりから此屋とりま。
 葭簀ナ日影を清くのナうそ。杉の糸よ人目とるる。
 算み多きりほくぢりまてら。鬼灯の玉を飛ちめ。
 車とくめらわてら。挽磨の猿をちりうのナむ。皆氣を

紋ナ涼を引より。上焦の熱をさり。渴をつめ暑を
 消し。一時の息が僅きんナ。精ナ威をくらへ。次麦小
 町を争小。碎客の補ひ。壮士乃賭ナ。祇園糸のよもみ。
 土用干の休ナ。き小想小。賀茂清滝ナ。芭蕉句に清滝あり
 の水は湯ナ。き。思分が美ナ。まおわこらんも。ちりく
 多麻糬頭の流ナれ軟ナらうのナり。盛付のるるを思
 けも。かほよおたのお磨せんナ。いぬのころあふ
 ちんこへき。の切通坂ナ。槍持の目を流させ。金松橋小
 言ナ。車屋其角句ナ。四并ナ。り。若れ足城ナ。む。又若れ
 ありきて商ふもの。前後の格子小。風塵をゆきて。

千工川行 而开集卷十五 頌 三少歳

桶ハおろり江の氣わのちりりし。陶小くくくの梨を
 煮して。うらなを片家の昼餉をちあひるる。冬
 いろくに深行しつる。まらちへのよすさひあひら
 日なり。あろひをさめあねる。親の心よかたねるを
 おろ。すへて長夏乃をさあへよんを。親を
 交易の理をちらん。いにくくさいふかまを。一は
 へからす。はあきと。世の寒やうに。其味の淡々ねを。
 そのお憎を。実おあねる。えとり潮をささく
 香ひと。あひまを。さす。程を。ひつす。程を。
 けき藤をほめて。人はす。わわま。し。おす。す。か。

彼らをかかちを惜とて。免ぐん。日に。とら。一。月。中
 おさめて。天乃。み。の。け。を。か。う。あ。れ。を。や。乾カ韻會云居の
 寒切燥也
 一字をい。つ。た。て。も。も。も。ん。の。ひ。び。き。お。の。ね。ふ。と。
 こ。ま。持。標。徳。の。稱。號。あ。う。ん。又。同。姓。の。縁。又。ひ。の。あ。り。
 け。ふ。ふ。乃。の。あ。ま。あ。う。ま。ね。く。ひ。の。あ。ま。ま。を。さ。れ
 け。ひ。の。や。つ。も。ら。ん。む。う。や。が。る。ん。さ。ね。母。さ。る。あ
 け。ど。あ。る。と。う。ら。か。け。は。ら。つ。ま。ぬ。仕。合。世。成。り。て。老。ほ。の
 ば。え。え。こ。う。お。母。一。計。終。り。

世話役頌

世又せまやとていへは。名目乃世話より出る。

うけ傳ふる業ありねと古とふく我人物の死んでおこる
 るの何より守。我乃きあよしかへて。その行ふのたやましく見
 らる。天世より一能ならぬ。是やその洞室よりしてけ
 器をたやましくんや。されと楊園の道小入。きともぐれ。又悔の
 ぶを和らるるまぢく。妹背お山乃中ま立む。良媒乃
 受きまも外小あらんや。あるは抱おひ初我人まかちりてハ
 心のきけきさひい。あるは様乃定。ちりく。い。さ。さ
 をみく。うき城耐めたる。出身の吹奉。遁世乃下。結ひ
 富をおめ樂。きをたふちと。救おなりと倦。ことあり
 られ。積善の餘。夢みて。取次乃出来。るるをわの。り。れ

贊

顔子書贊并引

粵有西顏子。若為像則敬禮而去耳。然唯沒骨草
 西破屋人物也。不題則恐無識名。故贊云
 一簞一瓢陋巷。七十朋友誰顧。不遷怒。不貳過。不
 改。其嗜哉。此三道具。

莊子贊

不知周之夢為胡蝶。與胡蝶之夢為周。與文覺則
 相半。與言也。戲花。

松江維舟贊并引

贊

松江維舟賴者才名世卒知之也予弱時初聞之於其孫弟牧漱石者而視其所著之諸集以知此道之古義故贊

教自古調狗獨集有類詞立門之言毛吹草解便紀氏序解懷子之古今序狂誘小町言是花曾乃心老梅百首菊百首開續笑鼻欠猿百首詠前書之野野口立圃贊

嘗有式未刊狂句法以前初廣斯墨矩行作噴寄基鬪花有碁打題硯慕古忠岑硯天井廻文中空磔天

井組河舟賴槽河舟譬密觀評語奇合珎奇職人句漢句成章祖

神野平泉二氏贊并引 寶井子稱忠知吾衆翁美鬼貫各知正風之故也

贊神野忠知

滿誓世間捕間手何物尔將譬旦捨譬春旦元何彌功子稱白炭昔乃炭也燒初發正風漸令向暖

狂句勸正道獨言德爭孤見屈為問昔昔乃近代也

贊

須麻能浦之句不知親如有春有道奈良奴名乎行先師常唱之句轉滑稽為瓶乎

桑翁贊并引

元文五年庚申九月十二日正當吾師桑負佐翁七周於是作其行狀為之贊又仍其在世之時面前所畫之肖像再摸寫以贊題其上而入干編集其名曰之中其辭曰
蕉葉雨滴寶井分流作意新涌趣向頓浮花發東
日月晴西時一身風骨解衆人頤

英一蜂贊

世人少交法又黙一て詞少一畫をさたハ人情
之態寫さく不交な一山水田野に遊ふく
好まは大都廣陌の喧一と居て画くとも
よく朝夕陰晴乃隈をわけ言低遠近をあや
やうきも餘り衣食器財草木禽獸一物として
物もさるあ一画くともさる万象大よやの小志法さり
とて粉本のたくもさるあ一先筆さつら快一
とす実小千枝乃志あみわけ北窓のちあふさ
枝味ひ初が故あさる一蝶去てらる蜂あり
蜜とらるも初あま一突磨十の夜十二カ世

行工刊行一而形集卷十五 十一 平石菴

山莊守姓名贊

勿言草茸山寂春寒娛麓松調待谷鶯彈里童來
馴邱守寢安昨花吹雪為主人殘

壽老人團扇画贊并句

南極老人弃這箇團扇疑電愛在鹿兒何不無班
女之恨耶然原壽域之器雖破猶能永年○月奈
羅波火桶尔也土礼澁團扇

衣川累女画贊并句

迷則為其夫悟則為其婦阿那恐止也世帶之守
神○あゝとめて女房志つはる月更かた

三女画贊中唐女左官女右妓女共見横卷
二色不睡一卷無字異國之女性去相談関孔

妓女画贊

彼郎不到夜長霧深自設己實徹画人心

美少年画贊風俗文選目錄有此題而無

誰描美少年志操見眼裡日日卷舒縮上已裂至
脂粉脱奈顔色何恥如將隱怒似迅去無情哉君
為雲則為清玄鳳巾之雨

近戸圖贊丁丑年寫本街

市上幽處傍觀日長寫廿間後借寸紙光

得賛 癸未年秋 匾照降 街茶舗文丁舎

照日而降はも賑てあまを壽く。浴湯を隣て九夏を忘依。却のけて村の伎も千秋松系む。産物を抱てて三冬を守れ。

唐山水賛

高山屈脊持賞一亭墨曇催雪岸繫空舫枯木春
近巧人幽冥若有倭蓆室内盡青

又

名墨山碧著黄月残一村臨水面面投竿中下帷
處主人何歡

中田砂卜画賛并序 庚辰年作

中田氏傳之丞泰于。幼名を忠之介といひ。むとちりて宗助といへ。性温雅英才にして筆墨城をこ。仙遊を好む。予本二街に住せし時。入門志て砂卜と號す。こゝろに居りあつけり。藿香亭と。又文杏庵と。よよ。日々佳趣をおめ。よりし奇句を吐成。それゆゑをこの秋九日と。おとくくに九唱を以寸。其菊の酒系ふ。雞をいむ。其摺足もこのてめて。菊かき。其ゆゑ。齒の美き入。疾れ柔乃酒。其きえの香。茄子も獲け九日饗。其菊瓶。袖をちふせと。や佞人。

口さけて老も交はや菊の宴其小刀の傷見せし人
 栗節句其酒結香の田舎かく守や葉を其九其猥々哉
 子よ字のみくわ葉結酒かひく多病ありて箱根の温泉
 尔あそふとよ又再遊志くぬ日つくちくそあそびて
 終よら月廿三日ふかきうのぬ深川三聖山惠徳寺了
 葬法年二十四なりし惜い哉嗚呼贊云
 誰の志多其五行配當の園生涯結精神若痕其也
 四大滅きといへし五物今なせり其おをる人あそ
 ぶ不遇もむ其白雲卒於婆も及古と成其なり
 俳諧而形集卷之十五終

俳諧而形集卷之十六

東都 解庵 皐月平砂 著

文章

記

宿箱根山中記

元文二年丁巳彌生十三日相州箱根の驛其やとる宿乃
 さまきよのしりて関城きふ心のまけし其善其ま
 月代い其まよと掃其く其心もやす其ち其まひぬ其向峰
 に出候雲も松人のたぐ火り煙くとるやア下其まの其木
 ね末を其ま其山其つ其の其み其び其せし其練其の其ま其ふ其松其根其の其み其か

けり。出で。杉場ひやくなり。かぬ。童のむれおろく
 るめく。次の雨ふ女の又。音など。山里
 ちと。くも。あ。す。は。こ。こ。木の造。松。の。を
 う。め。た。と。た。く。され。様。列。人。を。制。く。
 川を枕。せ。す。い。は。は。ひ。を。さ。峰。を。枕。く。
 しく。かく。も。の。お。う。後。ち。き。い。む。は。此。を。ち。の
 よ。持。す。さ。た。る。ま。ち。く。し。かの。樹。下。石。頭。い。眠。は
 とい。空。山。を。碎。か。て。天。を。食。む。他。ア。く。く。の。樂。み
 ち。る。所。へ。か。き。野。宿。乃。あ。を。ね。も。ち。う。む。戸。を。固。て
 お。宿。あり。も。に。枕。の。言。依。を。争。ふ。其。ま。ち。も。あ。ま。く

かり。ま。か。れ。う。う。は。う。ま。い。城。く。丸。は。き。と。ち。く
 か。り。て。あ。り。勢。

遊岩倉山記

同。一。月。一。日。京。三。條。の。旅。舎。に。あり。回。行。旅。菴
 云。東。山。の。一。ま。ち。い。ん。に。つ。て。ま。り。ま。ち。か。く。ゆ。く。に
 や。け。い。ち。ま。や。く。も。水。の。か。く。を。め。ら。ん。ま。い。志。う。し。
 中。も。も。宗。念。ふ。ま。う。て。ん。半。あ。ま。を。も。予。云。い。つ。れ。ま。を
 あ。ま。使。よ。ま。か。さ。い。い。け。く。ま。ら。あ。ま。の。さ。り。か。ら。う。て
 出。ぬ。乃。の。母。と。清。音。を。さ。う。て。ゆ。く。か。も。の。西。社。を
 ぬ。み。を。宿。り。ぬ。よ。の。そ。み。山。間。り。を。越。て。宗。念。ふ

あき秋(ま)のころかう出よきと。ひらりといひてま
かり。まのころしり入は。はきりりのちりちりせ
うねねと。いきりたすかなんを感歎して。あそ
らくあつたけいふすま。

近やもいおろろく足をとこしかり。是より

田股の徑十八町あまり。南より西よりけり。一
舟雲間不隠とき。虫はかく言はるる。さうし
燈のあきをもたけい。ねんりあきとさひつりけ
ち。ききまをうもる。あきりて。是破りちりり
衣かゝるにういあ。溝渠はくわくちりあち。危橋

まゝおる進まぬ。おのろくすは艱難なありあす。
孤り為小惑をもちやと。林下はあつまりて大息
す。すそにひらひら。此歌はあき。後亭をやとり
うて入。操あひあき。きとより容愁を
あつす。二十町前より操森をおりしり。あ
次り目内とに起る庭をあむ。

木はるくらし霧の網目目出しり
け二里の別北の帯乃海色りり

寶曆癸未のとし七月十四日 志保き
越州一柳菴記 癸亥年 六月作

越乃鯖江の閑居あり。一柙をきて名をす。主人
 甘棠子によく愛するよりてあらん。されども其
 所の心。人此より時又後へ。其出のたより。ま
 ま。人みづからに。かこらん。去る乃秋。東武。一
 ありて。け。故。又。か。こ。二。又。ゆ。らん。予。又。か。の。地。乃
 西園を。あ。入。て。け。庵。の。記。を。他。れ。よ。ま。り。ま。也。
 より。予。う。い。ま。ぬ。懐。ち。れ。も。い。ま。の。り。て。辞。ち。ん。を
 忍。ひ。た。ま。う。ら。も。せ。め。て。一。句。の。た。よ。り。も。か。ち。も。也。試。に
 あ。ま。を。開。け。も。門。は。一。株。の。茂。と。あ。る。よ。り。を。こ。重。山
 の。隈。を。見。ひ。帝。釋。山。ハ。高。く。天。又。親。し。こ。て。左。右。イ

春秋の日記出を定め。文殊の獄よりする。こ。不。ん。く。
 其名乃智恵あらんより。其形の。名。を。お。那。夜。
 那。夕。の。入。所。ハ。多。か。る。危。し。あ。ま。と。あ。り。す。さ。り。
 かる寺あり。住よけぬ。村あり。わつ。の。尺。内
 あ。り。す。て。千。里。の。眺。望。を。備。へ。り。也。あ。れ。と。風。色
 水音の耳。妙。なる。或。云。の。ま。ひ。身。鳥。の。遊。へ。る。田。夫
 野老。姑。風。俗。を。い。み。ち。り。て。記。し。め。ん。や。
 き。く。あ。ら。山。の。名。を。い。ま。す。也。柳。り。を。深。き。二。つ。の
 も。の。を。一。い。ふ。彼。ね。く。何。ぞ。心。を。あ。ひ。く。こ。も。り。

白山も頂恥よなる川やを曳

器宗軒記并引 丁卯年 秋七月

詩乳山背水亭新成山田文暗氏欲贈扁額令予記其事雖未見此亭略知波地因書介記曰

墨田川小のそとく何し此別荘あり器宗軒となつて居るのハ何ぞに文采の拙好あふより其を貫くせうともものをあけて位所の夏を宗とせぬや。さうふふ名とそろの美景を宿て詩歌書画の四ツを入らん。これやよきうつちを乃りてきわめおれをむねとせしん。きわめて此流を賞しあふ古人の心を先ひてをひるす。倡門かおふのさな

とあつて。閑居をもむむ。おせそのそ多のうん。ちりもあねと川下の紫草をへく。やうおとさ。さしおま。をねと。田圃のちやわお目をやく。さし。草木お多ふ。氣をおさめて。ものつ。き。乃。人。た。の。む。城。かの。桃李園。乃。あ。つ。ま。り。き。は。お。の。る。金谷の酒沙。休。ま。及。ひ。し。き。わ。せ。ま。る。も。一。作。の。海。ま。く。ん。と。ハ。何。よ。り。わ。せ。も。器。を。お。ら。と。ま。す。へ。し。

三日存乃影や店納戸のうら

狒狒窟記 己卯年 二月

家城狙立充人狒し。狒。嶮。を。云。其。故。を。問。又

いへふるやある。世に猿の老しを辨くす。我れ
潜の利根を謀て。みつらう狙の一字を又ふれし
らり。漸く一以乃似合しき。やうてかくおのひ
よるをとり。志あるを予以ては半を序せ
し。予がの記しを向。以て儒名抄に抱朴子を
引ていへらく。猿寿五百歳則變為獼。漢語抄云。夜
麻古なわと。又猿の辨くさなる事。李氏が書ある
を見るとへらる。うねのへか似て髪をらかあり。
深山の中まかれ住て。ちんろう老猿のひしから
しむむや。又ふらら笑ふといへる。ある終笑のそ

おおむらして。花又わくく。一月おらぬありし。
於訓蒙圖彙又授ひく。岩窟の如く静坐すへし。

と松きをものせひや老乃友

修榭亭記

榭亭の主史林。修造此志有て。匠を用ひる事年ひき
し。さういふ木乃榭の佳を去るより。欄又ちりをも
お伊をもありて。心むとの意示をせむ。こころ
入札の候は。及もさうらう。と春秋抄のいふ。時暮れ
もや。此れふ知雅も。守供あらし。繩をよひひ自給を
ぬて。紫月の守す。に成ぬ。さうの文房書櫃の

飾了也。笛太鼓の席にあてて。嬰兒の笑ひをよみてし。
乃又雨の大作をうらなく住居る那

静庵記

静菴者予之弟也。初不知此由。縁聞叔父澤石
之傳稱身或時看亡父之遺書止我。壺形と印中
尔。有静菴之文。計礼波偕社迅有以名。天斯呼来
止物成。歎土。身限毛喜波志有来。左有則此静之
一字者。以如何成意。嫌奴濫。其菴之静成耶。其主
之静成哉。推計其意。試解之。則當在市中之
喧天。業酒生之術。乍混尚好。其菴之静。身不知履

満戶外之栄。与所謂日出。手柄。尔有若主之
静成。尔天。安詞在。疑不。静唯心之静。乎。诺社。按不
粘前之杖。天。令不附。鈴子。篠葉。流。欵。实也。似。儒教
曰。静坐。比。称。門曰。在。祥。比。徒。空。念。土。志。云。静。成。中。
覺。至。極。之。熟。味。也。所。謂。宜。因。此。菴。中。之。文。字。天。察
人身之小天。地之意也。良米。菴。法。也。醫。師。之。通。稱。
而非。謂。此。菴。獨。出。毛。静。尔。入。毛。静。尔。其。日。其。时。之
静。菴。而。不。啻。若。常。住。之。静。也。何。嫌。隣。之。噪。布。耶。予
寓居此菴。天。雖。年。月。馴。彼。一。字。有。他。語。之。一。癖。也。
自。静。中。動。出。天。变化。自。控。之。理。也。武。左。有。共。煉。句。

五言刊行 而形集卷十六 記 上 平砂

治字日若。ふ静。何為年。昨毛静。尔冷。蒙静介。日
 日傾。道歌。天我静。許將。人目。斯記。讀了。則。
 聊知。結静。年欣。時享。保九年甲辰三月九日。黃困
 石留。醉濺。毫於。静庵。南窓。之咲。分桃。迺下。

卜居故柳巷記

元文丙辰のち。三月十日。武陵城。結ひ。のり。
 結波橋。小川。橋。乃。南。極。を。お。む。け。地。や。い。ろ。へ。乃。廓
 あり。て。元。吉。原。と。呼。ち。り。し。け。不。又。川。の。ち。ま。さ。
 四。の。ち。の。ま。其。西。を。大。門。通。と。い。ひ。東。に。龜。河。岸。と
 い。ふ。ハ。や。き。そ。は。昔。の。形。を。失。ち。す。て。さ。す。不。寛。濶。の

時を。顧。ふ。に。さ。そ。を。あ。つ。つ。め。ま。夜。不。懐。旧。の。使。す。ま。か。ら
 す。さ。ま。た。せ。う。つ。り。人。か。ち。あ。り。て。我。れ。の。幸。の。ち。や
 を。そ。り。あ。り。ま。し。か。ら。せ。う。ち。を。も。只。お。け
 ろ。け。ま。き。し。つ。あ。の。の。家。く。の。徑。門。し。然
 溝。を。と。ま。い。つ。ち。り。の。か。ち。わ。ぬ。らん。其。の。と。あ。れ。と
 市。中。に。用。を。甘。あ。ひ。く。景。と。は。目。を。怪。ち。し。め。む。ハ
 さ。い。ち。の。よ。え。ろ。ろ。む。お。お。か。き。の。亦。と。い。ち。ん。東。を
 三。派。乃。潮。を。入。て。兩。岸。に。乃。む。け。つ。り。舟。よ。小
 人。の。お。り。し。橋。渡。り。釣。の。足。音。入。場。不。深。寐。す。る
 鷗。吐。水。を。る。つ。つ。鷺。池。館。く。の。木。末。ハ。空。乃

真間葛飾のさむかしの。一とせの農事ハ此らも。塩やき漁する浦のつと。樵蚕する里のいとちみま。一むすのこまわをぬきす。ておのぶらうも。いりてるあへく。さき静忙の間にたまわて。よろつみ自在なる地ちりり。西よあ。戯場あは街近く。ほりありより。小色曉を告れをきく。この種乃磐地より。お記のるよ。かの三遷のため。又あつて。寐地乃。仰へきや。ちりも。あふ方丈。破屋を開き。場を。拂ひ壁を補ひ。すてに一家のあ。と。な。り。ぬ。さきを。仰。け。ぬ。を。も。一。か。か。い。ふ。つ。よ。い。ね。て。さ。ふ。

くれあす。と。い。く。ま。に。志。ち。し。を。か。を。む。き。は。ち。あ。り。あ。い。せ。ら。う。に。さ。き。か。は。ら。う。を。飲。食。の。後。目。を。て。決。計。い。ら。ふ。と。お。り。あ。ま。こ。や。天。の。意。と。あ。り。て。お。と。示。切。餅。乃。伎。利。ち。り。あ。れ。を。か。く。不。精。製。の。蕎。麦。と。あ。り。て。且。着。の。自。由。い。き。り。ぬ。れ。も。う。終。ぎ。へ。日。を。あ。ら。せ。あ。り。て。出。身。合。の。蒲。鉾。は。庖。丁。乃。世。所。を。ま。め。れ。焼。立。の。因。樂。ハ。火。疥。が。面。傷。を。こ。す。て。一。口。残。乃。流。式。も。か。く。呼。滿。後。も。さ。き。を。お。あ。さ。さ。き。を。素。湯。ハ。香。煎。を。も。廻。一。か。終。り。と。さ。き。め。ぬ。抑。北。菴。を。隣。と。して。世。を。い。ひ。お。ま。ら。る。人。あ。り。む。り。を。千。金。の。あ。ふ。あ。り。の。志。を。一。か。月。の。き。り。き。

宴州千行 而开集卷十六 記 十一 平石菴

勝りしものよきまゝいへるにまゝてやめて足首乃
 片久杯をこふやきんあつらんやかくいふ又
 藁虫の養ふかれ坊の売をこのまゝすゝき
 ういものたのむ交と。松樹の勢乃あつらんをあら
 わや。よりこれ初後心の一寸もちにあを極樂と念
 ひしるるぬ樹下石上乃すまわなむと。きりくた
 三年のあてまりとまゝす。いふの巧み起らん
 ちよりも定務らんぬ。當前のむすぶをめで
 ち時を其何乃指圖よまゝあるゝ。

洩敷のちとちれあくら月不記

移居本二街記

寶曆丙子の年卯月十七日。和泉坊上より本街第二
 街。長松菴乃地隅の移居也。此地すへて綵帛舗多く。
 門の大商あり。壽字號を以寸。故不弔。為は先わふ
 家おもてし。の字とゆて省をたまひぬ。今構へ
 する舎ハ。村を面するの佳ありといへとも。市を
 うへるは。ゆるめあり。あてて。わのた孫をいれ。漸
 性を喪ふ。

其物と一皮を移す。何れ乃那
 少より多き。不いへたほくき寸

得月樓記

二年丙午月すま。月出るより新き一入る。居
 ちうふい清光をあゆむ。いつ秋のふれ秋のふれ
 まさりてま。ち人出。崎陽の道栄子。いつく乃
 人。贈られむ。得月樓とかけ。額あり。多き。
 予。門人砂分山田か。りもの。あ。入る。ふ。ま。月を
 得。る。者。あ。ら。き。り。を。得。た。新。お。さ。き。て。は。あ。ら。る。ま。
 新。瑞。あ。ら。る。を。一。つ。い。か。け。く。ま。と。思。ひ。な。き。ぬ。と。言
 こと。先。時。ま。る。か。い。月。を。得。る。を。や。ら。き。り。あ。ん。と
 せ。り。も。か。ら。二。階。の。い。ふ。せ。き。か。け。て。は。樓。の

一字の似あき。か。ら。い。つ。を。満。座。の。洞。客。ま。あ。い。つ
 ら。く。あ。ん。を。樓。を。得。る。か。時。あ。ら。る。ま。月。を。こ。と。と
 す。や。ら。き。り。あ。ん。と。思。ひ。な。き。ぬ。と。言。て。お。き。軒。端。に
 掛。を。む。し。た。名。黒。光。照。照。て。こ。よ。ひ。の。月。み。ま。し
 人とかりぬ。

九竿齋記

丙子也。一。竿。砂。ト。あ。の。垣。根。を。こ。え。て。一。ま。の。竹。あ。い
 ぬ。あ。ら。る。や。地。ま。き。わ。て。ま。に。我。右。の。窓。を。け。り。あ
 入。ん。と。す。れ。た。繩。を。も。て。板。を。ひ。り。を。な。て。直。た。ら。う
 一。め。んと。す。その。勢。ひ。の。ら。け。け。れ。を。ま。や。其。冬。の

葉よいつて。どかたりはぬ。枯ぬ。次の日。夜三時
 ば。きて出。黄なる皮のやちうふちひて。孫の只
 節。ふみちうら。そ母又曲ら。次してぬき出。し
 ち。云。排人い。まほひのめさま。く。ふひあ。たの。あ
 ち。ん。を。未。き。け。も。ま。い。を。忘。れ。し。や
 小齋をちつけて三竿崇と。関子肅氏乃書を
 こふて。扁客と。又次。此。年。二。も。と。を。そ。ふ。五竿の
 名とあ。あ。あ。あ。あ。又。續。いて。二。本。を。ま。す。す。い
 名。紙。極。系。乃。時。ま。の。ら。ん。と。守。時。い。漸。亦。乃。廿。悉
 尽。く。わ。は。お。ま。を。の。つ。う。ら。九。竿。前。と。な。り。ぬ。

七隅舎記并序

得月楼主人ハ心高し。九竿齋主人ハ心沈み。はる月
 主今東隣の地ニ移らんとす。九竿主とめてい。ち。く。
 君ハ得月楼ハ移るとい。も。又。得。川。へ。一。我。九。竿。廿
 乃月ハ又。は。り。小。移。し。う。ふ。於。て。進。ま。ぬ。を。は。る。力。主
 勅。也。と。て。曰。我。初。め。を。は。る。て。あ。ふ。即。名。と。守。今
 於。不。於。て。地。を。た。し。か。へ。ア。見。す。其。日。つ。ふ。八。九。乃
 竹。ち。ん。不。新。む。た。ら。ん。や。い。ち。ん。や。土。を。う。か。せ。り。
 根。を。移。さん。か。ち。ん。地。か。つ。き。こ。の。あ。ら。ん。や。と。
 九竿主曰。我。け。竹。を。お。こ。せ。り。と。ん。不。八。九。乃。勅。い。

意つた。書案文篋をか守へく。産道の潤なもら
 能新なり。またかくに自由力を任するに。以てすくれ
 くり。きるをひ屋のかまへ。屈曲あて暮をやし。
 斜日窓を射縁をまひ。四壁をびわもちて。清く濃し。
 おちりし。かそふねを七筋あり。これ唐中の一絶と
 称すより。ちつけて七隅をまよふことよ成ぬ。

良材肆記

ちこをあまりいふめいれす。あつちゆうせき。
 あつちゆうせきを扱き。いつてせいとあつちゆうせき。又
 位すはらうのふまわぬ。あつちゆうせき。庚辰きぬさうまの始。

本二街の舎を去て。日本橋南の西岸へ下りて。又移居。
 此れ此地也。街二の角を上と。北を下と。南側は
 商家つらちり。北側は古室あり。世に杉木河原とも。
 櫻河岸ともいふ。あつちゆうせきの産物なれや。又檜乃
 異木にすくれり。と始として。ち外の貴きものもよく。
 貯へるものあり。ちちり。館品つくちちり。小教を知ら。
 交易する時よあつちゆうせき。路とふらいて。こね秘す。走等
 此地の勢ひも。書法別一家をまわり。又岩をく
 余地ありて。徳橋たうひまきぬ。移して。井柳みぬし。
 車とて運ぶあり。船もて送は有。是れは。ちちり。あつちゆうせきのあり

まゝなり。風の日も著あく。園乃状も遊ぶその水し。
 け本香よりも希りて。灯おのつさぞのつら。志いのまり。
 と予う後予う霞い。壺月の宅地ありて。ほの平
 来川のみほひ。隣ちるより。二子の風流の加ありも
 さうて。回氣を招き。かとうさひなう。新居の事実
 とちさ。いらん地。予ハ詞林に斧を大て。文場又造作の
 儲けをすれハ。良枝樹となつけ。内々。古地ハ佳品ふまて
 らへて。市朝のまゝ。らゐをむす。ふとをなめ。

毀古倉記

西岸乃宿に。よ。うりき。家不蔵のといたる。壺月ちうを

過る。以。朽て。似。き。け。せ。て。翫。き。内。外。を。う。ひ。こ。る。
 の。こ。い。ふ。さ。そ。を。う。く。か。へ。う。す。二。日。こ。う。せ。な。ま。こ。ち。
 さ。り。ぬ。寸。不。暗。室。明。を。せ。り。万。が。事。つ。ま。ま。ふ。る。便。り。
 け。い。へ。夜。ふ。く。り。て。ハ。銀。河。枕。の。と。み。横。を。り。つ。き。て。予。り。
 雲。の。空。地。す。こ。い。ある。ハ。露。時。面。を。い。と。ふ。る。ふ。を。於。
 け。す。ゆ。み。成。ぬ。かく。あ。れ。も。又。秋。の。名。跡。も。い。た。る。と。と。
 あ。を。後。う。り。入。を。い。は。り。乃。影。目。の。く。ま。き。ま。う。の。古。は。
 け。捨。れ。せ。う。く。る。を。の。つ。ら。景。を。み。あ。ら。き。近。を。
 くれ。え。丘。の。如。し。き。あ。く。こ。る。心。を。は。て。ハ。峰。重。た。り。谷。廻。り。
 竹。の。屑。乃。貫。る。さ。ぬ。棧。の。危。き。を。う。つ。一。瓦。の。碎。け。く。

披まわる。路の岐乃勿り。藤繩の端のあり
 まり。あつる。深山の黒う。茂れ。も。規乃。か。一。貝
 三。つ。つ。り。遠。結。一。村。の。雲。お。ぼ。り。か。と。あ。小。荒。木。田。と
 以。る。塊。の。場。あ。が。お。く。ふ。あり。て。山。路。ゆ。く。人。の。か。こ。も。を
 な。も。作。き。て。う。す。じ。る。俯。た。て。く。る。有。物。負。ふ。る。お。付
 有。へ。る。あ。ま。或。は。洞。裏。に。う。く。ま。り。あ。ま。石。上。ま。ち。を。ひ。次。
 山。勢。た。ど。お。て。前。後。奇。削。平。ら。ら。に。て。簾。あ。る。ま。侍。あ
 かり。あり。一。山。倒。り。霧。を。落。せ。り。い。つ。せ。の。旅。の。欠。く。系
 り。や。飛。入。り。洲。と。なり。嶋。と。形。違。り。扱。芥。を。舟。と。ひ。り。
 古。き。海。の。似。合。一。き。も。あ。ひ。け。く。る。の。餘。也。真。子。あ。り。す。

假に何處も。むろふ造化のよ。際を感すれ。た。智。も。なく
 なく。く。ふ。も。海。と。及。い。ち。り。ぬ。聖。日。備。の。若。乃。踏
 抄。く。智。時。お。け。ら。へ。ん。も。あ。ま。け。あ。ま。戸。も。あ。ん。産。も
 う。つ。た。秋。の。ゆ。ま。を。き。せ。み。し。ハ。古。結。の。寶。乃
 ち。け。も。の。や。あ。り。多。す。

おく。海。の。元。山。ふ。あ。し。く。ら。れ。ち

驅厲鬼記

享保十八年癸丑七月。外感風邪行をね。世上回一尔
 苦。く。た。る。あ。ま。を。の。つ。く。中。元。の。つ。ふ。き。な。ま。た。ま。乃
 祭。ち。と。な。ま。く。あ。り。お。ほ。と。を。す。て。に。東。西。の。ま。ち。く。

各こぞりては邪氣を被ちんと。菓をきて鬼の形をす。
頭紙の袋を被らと。方海羅乃衣を覆ひ。よ大國の
の破れしを被せし。精を後寸のふしを成し。
肩輿小籠笠の屋を覆ひ。二の幡は風神乃名を記し。
大坊いさま。かききり。あるより太鼓打りて。本復
し。けり。かきり。は出集り。あつて。と發す。まうに。
そ声天は陽氣を發し。や。あ。きり。人まを。少。
枕ある。わ。の。なく。さ。沈。ちり。予も。ひ。る。や。る。悩。み
く。り。あ。く。は。快。全。の。悦。を。ら。て。甚。の。飯。試。は。日。は。あ。ひ。ぬ。
あ。と。少。わ。の。澄。云。や。終。乃。を。

迎火子ちひははまのきりしけり

復生記

享保十九年甲寅弥生中一日。流行の病ふて。頭いと
やましく。内におに。このあ。ぬ。時。橘。溪。博。泉。子。赤座氏
名玄益を
迎へて。始て。茶を服し。ち。は。汗。や。衣。を。ひ。り。ち。り。あ
く。ま。ふ。記。外。も。や。す。り。し。あ。ふ。患。は。あ。の。痰。飲。胃
膈。ち。る。子。結。ち。あ。わ。て。此。根。は。と。不。苦。し。ぬ。れ。も。次。の。日。も
又。い。ろ。ろ。り。と。お。も。ろ。く。ぬ。新。ま。人。の。ぬ。抱。ふ。を。ろ。ろ。あ。し。
茶。用。ひ。て。一。日。救。い。ま。う。一。旬。を。る。さ。れ。も。治。の。い。さ。り。
あ。ま。し。あ。ま。し。の。あ。ら。ら。こ。ろ。不。患。齋。の。あ。あ。無附氏も
名宗源も

書をよむ。よりて初秋の日。新書もたの。長月の
 忌むよあそへ。一字不報恩の心をあへ。千句の
 懐の情をうめむ。唯あそへ。根才を
 糸あへ。願望なる。にさへ。んを
 学ひて夏又入むせ。こへ。藁

俳諧而形集卷之十六終

俳諧而形集卷之十七

東都 解庵 皐月平砂 著

文章

記二

机記

夫机者。自初登山之其日。令打持左肘。且。乍幼心
 之苦。毛。守。手。習。状。々。於。氏。か。己。ハ。カ。之。城。郭。双。左。右
 女。視。之。寿。毛。筆。墨。之。天。毛。皆。送。筆。於。此。上。波。汲。水
 滴。之。露。乃。隙。副。為。結。果。心。地。良。米。漸。至。十。四。五。之
 頃。齋。師。匠。坊。之。内。習。之。寛。務。成。毛。凭。之。掛。之。天。

猶一日一字之功。一生之德。毛。第代之實毛。將
 謂皆在。此上。指放蕩之家。尔。被倚向棚上。天。
 適有神事佛事時。為灯明。佛物之下者。毛。竟倚而
 方之。御。且。逢于新繩之痛目。昔。可。無。情。事。左有
 乎好事之輩。看破以前之風。雖建新法。之流。亦
 不棄之心。副。益。橫。孫。上。天。奈。為。居。眠。之。助。耶。然
 倦。儀。樣。之。律。儀。且。摸。唐。風。之。洒。為。破。必。并。去。之。心
 且。以。厭。出。來。合。之。岩。來。代。物。為。奇。之。殊。儀。如。或。堂
 堆。米。之。色。或。黃。青。貝。之。光。等。返。者。其。用。左。費。入。日
 角。之。手。寫。備。立。硯。屏。置。筆。道。秘。淘。文。籍。之。飾。物。尔

波。袂。之。上。且。終。失。子。手。之。掛。而。如。爰。所。予。嗜。也。同
 吾。有。信。之。所。贈。而。如。履。良。工。之。人。且。用。島。桐。之。幹。
 長。參。尺。壹。寸。四。分。橫。壹。尺。壹。寸。貳。分。高。是。壹。尺。奴
 監。中。収。三。抽。斗。且。貯。藏。當。室。之。及。古。下。垂。四。綠。御。
 之。號。遠。作。在。之。名。利。世。利。以。朱。漆。塗。外。以。黑。漆。刷
 裡。上。敷。紅。毡。也。慮。押。印。硯。次。接。毛。軟。也。如。履。而。不
 俗。久。而。不。弊。揭。臂。與。痺。心。安。難。退。比。寫。自。初。成。建
 於。今。十。餘。年。治。鐘。敗。漆。兀。具。合。廉。微。違。若。在。南。信
 之。手。亦。多。載。和。漢。之。書。藉。而。令。惜。之。人。之。才。智。今
 親。若。儼。之。孫。能。浮。歲。日。之。極。向。且。打。守。隱。也。之。點

少也月丁 行少集卷十七 記 二 三少載

箱劣因^チ語^リ之^ク云^{ハク}汝^ハ後^ニ過^シ十^年日^數天^ノ介^抱二人^ノ
 之^ク立^テ利^シ。二人^ハ殆^ト為^リ疲^レ汝^ハ殆^ト不^レ太^ク換^ル好^ク哉^ニ二人^ノ
 未^レ練^レ成^ル毛^ノ面^ノ之^ク不^レ差^リ用^ル而^モ不^レ得^ル去^リ似^シ汝^ノ之^ク良^ク材^{ナリ}
 也。然^レ我^ハ庵^ニ小^キ成^ル増^シ而^モ凋^レ度^ハ不^レ多^ク中^ニ其^ノ大^キ好^ク唯^ニ汝^ノ
 与^リ我^ノ耳^也。且^チ携^テ布^ヲ拭^キ去^リ四^隅之^ク汚^ラ者^ハ夕^ニ執^テ帚^ヲ天^ノ
 拂^テ除^ケ一^日之^ク埃^ヲ奴^ハ寢^ル則^チ抱^テ似^シ豆^ノ狀^ノ之^ク漆^ヲ寐^ル毛^ハ不^レ
 睦^シ也。猶^シ然^レほ^シ之^ク柔^ク有^リ左^ノ毛^ハ擽^ラ常^ニ也^ハ雪^ノ之^ク解^レ氏^ハ宜^ク照^ス
 学^ニ乃^チ窓^ヲ杼^以叩^ケ之^ク波^ヲ毛^ハ簪^ト下^ニ少^ク諾^シ志^ハ氏^ハ出^テ我^ノ友^ノ
 之^ク聲^ヲ利^シ。是^レ有^リ類^ト具^ト成^ル杼^ノ毛^ハ自^ラ奉^テ多^ク毛^ハ潤^シ突^ル天^ノ
 述^レ所^ノ梳^ル由^テ來^ル多^ク里^ノ行^キ末^ニ其^ノ持^テ何^ノ人^ハ左^ノ毛^ハ以^テ氏^ノ

記^シ之^ク為^リ詠^ル狀^ノ後^ニ叙^ス

○元文二年丁巳冬記之後
 延享三年丙寅為火災也

未醬牌子机記 寶曆十二年

獨蒼起波^ハい^まま^わか^ア一^寸石^川柏^山乃^チ筆^法を^シ学^ビて^シ
 此^ノ表^面の^三字^をま^まと^しわ^らず^にに^を使^フく^まふ^墨痕^を
 亦^ハた^きん^と守^リ今^ノあ^らう^もり^テ愈^めら^しめ^ル不^レ納^ル也^ハ否^クイ^フ
 之^ク穀^林史^林子^のあ^らう^もり^ト通^家の^故あ^らう^もり^トて^シ
 い^まま^わか^ア一^寸石^川柏^山乃^チ筆^法を^シ学^ビて^シ
 二^御小^わら^しち^て文^房乃^チ一^友と^なせ^り。
 い^まま^わか^ア一^寸石^川柏^山乃^チ筆^法を^シ学^ビて^シ
 上^味増^さあ^らう^もり^ト也^ハ否^クイ^フ 又^チ予^ハ城^ノて^其由^來を^傳へ^しむ^もり^テ

屈曲あつて。滄波^ハをまかせ侍事。紅縹^ハを^{又ヒ毛ノ}補^ハせらふ
 のころ。一体あつてにさき^ハといへど。花みかくおほむ。
 河^ハももつて。老^ハ迎^ハをのつらうわさあ。なんりひと人平
 錦^ハの看^ハをなさんや。かの調和^ハ元禄年間^ハ必^ハ言^ハう
 ちて。武^ハ江^ハ不^ハ判^ハ考^ハの古^ハ老^ハなりしと。そ^ハれ^ハ遺^ハ物^ハ二^ハ侍^ハり。
 予^ハり^ハの^ハに^ハあ^ハ侍^ハことのおもひ^ハよろ^ハ福^ハを^ハそ^ハあ^ハひ^ハとの^ハる
 け^ハ惠^ハ越^ハ謝^ハして。古人^ハの奇^ハ玩^ハを賞^ハま^ハと云^ハ。

藍^ハも^ハも^ハむ^ハ也^ハも^ハむ^ハく^ハれ^ハ茂^ハく^ハ也^ハ

己^ハ己^ハ 寛
延^ハ二^ハ年^ハ也^ハ

和^ハ三^ハ 土^ハ屋^ハ君^ハ之^ハ侍^ハ醫^ハ
也^ハ寶^ハ曆^ハ六^ハ年^ハ丙^ハ子^ハ秋^ハ没^ハ

剃刀記

し酒の多長^ハ乃^ハ末^ハ決^ハり。美^ハ濃^ハ其^ハ様^ハを^ハ全^ハ東^ハ甲^ハの
 畏^ハあ^ハく。大^ハ垣^ハ清^ハ則^ハち^ハる^ハもの^ハ打^ハつ^ハる^ハ剃^ハ刀^ハを^ハた^ハう^ハ人^ハなる。
 そ^ハめ^ハま^ハれ^ハ小^ハ故^ハあり。み^ハと^ハと^ハせ^ハあ^ハま^ハり^ハさ^ハま^ハる^ハや
 我^ハ先^ハ河^ハり^ハ佐^ハ翁^ハの^ハ白^ハ。松^ハ木^ハ陸^ハ琳^ハの^ハ難^ハ髪^ハを^ハ禿^ハして。
 涼^ハ一^ハ愛^ハ潔^ハ剃^ハ刀^ハ所^ハ流^ハり^ハ所^ハと^ハけ^ハ以^ハよ^ハり^ハそ^ハ越^ハを^ハ使^ハ
 して。か^ハの^ハ舌^ハの^ハ利^ハを^ハ試^ハみ^ハよ^ハと^ハなる^ハへ^ハ。せ^ハら^ハ研^ハ入^ハ
 か^ハも^ハか^ハさ^ハ小^ハ用^ハゆ^ハま^ハも^ハ羽^ハを^ハま^ハて^ハ摺^ハ侍^ハく^ハと^ハく。漸^ハ不^ハ
 して自^ハ軆^ハを^ハけ^ハす。百^ハ會^ハの^ハ旋^ハ毛^ハは^ハ指^ハれ^ハあ^ハる^ハ事^ハ
 なく。あ^ハら^ハの^ハ髪^ハ際^ハ又^ハ心^ハを^ハけ^ハる^ハ。か^ハの^ハ縦^ハ横^ハ随^ハ逆^ハ
 自^ハ他^ハ又^ハ出^ハ流^ハを^ハ受^ハく^ハぬ。か^ハの^ハ氣^ハ乃^ハあ^ハれ^ハ病^ハなる^ハ。

甚しく患はるるを以て初むる。用ひ
少候しきるがあがきた昔も。さきを以て銚物とて。
茶石の二いとむめをくり。いふあるまより消息の使
をる。これとそれありけ。此ひをのをむ。かの名もり
ゆふ對して。産物の用をかむ。事あり。

養老の日記も安し。小六月

明和二年乙酉十月贈之

藥罐記

高麗茶箱につて。さうふ我友夜芳のさかなりて。苦若又
も枯瘦を愈せし。そこのほく。きをくわのわもま
あす。時。予始て。これなめ。所。我。い。つ。こ。あ。す。

是予の室のまをり。されと毎日用に使あれ。いん
もすへ。い。ま。や子。望。物。あ。れ。を。それ。み。か。へ
お。ら。う。と。か。れ。す。や。ふ。許。し。あ。う。い。か。る。室。あ
有。り。ま。う。を。裏。附。草。履。三。束。又。か。へ。え。と。い。ふ
出。と。終。る。い。ま。ま。に。笑。ひ。は。ぬ。む。い。ま。義。之。り
大。玄。經。を。ま。を。考。ふ。か。へ。い。ま。ま。の。あ。つ。ら。い。ま。を
そ。歌。の。手。抄。み。り。あ。り。し。と。て。耳。に。て。是。れ。の
傍。に。酒。の。さ。び。な。ま。け。二。さ。も。も。ち。な。の。雲。泥。を。れ
も。力。を。考。ふ。の。は。い。ま。ま。の。手。抄。に。此。茶。箱。い
お。る。形。ハ。瓢。の。下。か。ら。う。の。ま。ま。の。折。乃。上。光。あ。り。

めぐりの十筋の柳條を並へむ。菱を穿て飾をちり。
 蓋を六辨の花取堆く。蒼葡萄なと君んかか。
 ちりほ一し。鉤一二十七の星を打出ちり。列宿乃
 敷をあつたまちらん。たちち章角の星と君んし。
 此活物のうらむをむせさるんや。底落うきく沸ふ
 小不く。口直うしてうつさふまきと違た。乃座右の
 火神まけけむ。むのあしを月世夕も。若く言言乃
 吟ふより。尚不我我の茶漬まで。に月容の湯ふを
 追出茶も。さひ力の運自ハ。いり力又出すと云也。
 形一。ちりのくちりのちり。ちり水の意用又傳ふ也。

文房の友も劣らうして。さつら茶売の濃をむ。
 一。日まに底のふきかりをぬけた。其光老の歌み
 似て。いりむも心堅固とさゆゆ也。あしりの餅の
 一ちり。氣にぬめむをむ。ちりんこり。あかつる。ちり

煎茶筆筒記

賞茶おまよ旅筆筒といふ名を負て。あつた。炉色乃
 小架をさねる。盧全の歌をすて。陸羽の經をちり。
 きて。きく。一。片みのお世より。おは。其香の火より
 より。ちり。おの。おふ。ちり。自然。あ。味。い。を。む。
 ちり。ちり。あ。れ。禮。た。の。き。に。あ。る。ちり。燕。ちり。ちり。休。す。る。

ちあしちせしめや。おちよりけいのぬし。古語かゝるときに
 必等しき。字體をえらふものハ書面乃く終し。えあり。
 ちまて文字の義をせしめず。音韻をかり乃て安とせし。
 名らき。ちり。乃て使もつ。あ。つ。の。支。平。小
 訓て。目に訓耳。又あり。より。他人乃口に。い。列。ゆ。を
 我。の。備。ち。の。の。名。と。定。め。れ。や。又。又。一。句。の。ま。と。ち。を。
 ぬ。い。ち。ち。の。志。終。し。け。く。乃。受。し。れ。よ。か。ん。こ。ん。と。ぬ
 を。お。ゆ。乃。を。る。な。り。久。我。門。才。一。為。業。更。名。の。萌
 づ。い。し。お。及。へ。た。前。日。姑。安。の。費。を。積。り。て。せ。ち。乃
 功。名。を。待。り。せ。ゆ。ゆ。り。

寛保元年
 辛酉年

名仙峨子説

仙峨子故辞して軟中人といふ。古学並草書の筆勢
 を論じく云。軟中取硬硬中取力と。他修不虚实を
 説きも。又。は。そ。不。似。し。ゆ。事。あり。と。り。て。今。子。故。表
 号とす。

延享二年
 乙丑二月

行狀

桑桑畔貞佐翁行狀

抑我師。東武の生種。風雅を四方に及かせり。
 さ。心。を。た。め。の。名。故。塩。車。と。い。ふ。字。を。永。房。や。つ。ふ。
 来。畔。と。標。す。は。よ。の。ハ。桑。岡。の。氏。小。より。て。及。り。

書学ハ初柏山石川國智の庭よりすまてすて又行草の妙を
 極め。中ころハ芥舟荒木菴水の流を所すす。一すち篆隸
 の源を尋ぬ。及や、仕なる及てハ、其まましく法帖
 を集め。きく。城ハ二王の骨髄をうののちむとす。
 さかハ李氏李氏の筆をすすちああららめ。いいののれをを見みひひららきき
 ああららん。扁額扁額の字を飛飛。印章印章の刀ををめめくくすす。乃乃ハ酒を
 このちちりりすすちちりり。一一日日碎碎はは只只醒醒て。詩詩つつりり文文をを守守。
 數學ハ久田島名喜内字義太の小学学ひひて。よく天元天元の高みみハ
 けけんんと。志志をを地地算算ハ日用日用ハハくく。圓弧直術圓弧直術と云
 云云のを使使りりて。門人門人の使使とといいちちりり。他他皆皆ハ桑翁桑翁の門門ハ

久田島

名喜内字義太 林奇活先生

小学ひてよく天元の高みハ

けんと。志を地算ハ日用ハく。圓弧直術と云

云のを使りて。門人の使といちり。他皆ハ桑翁の門ハ

存存く。其其の教教ハ稱稱せせるるは。文章文章ハそのつつららくく。
 古古人人ハいいちちりりすす。いいふふは。ややままくく長生解湯女説長生解湯女説或或ハ
 霜葉歌の一章ハ子子をを止止るる。其其つつままををくく。柳柳蝦蝦ハ乃乃
 一冊一冊ら。其其をを持持るるの憂憂ををああららむむ。
 養記養記夕夕千紀行千紀行をを除除て。杖杖活活予予の類類。ままハ柳柳葉葉乃乃
 ままああららすすも。又又坊坊のの絶絶ををくく。ささららにに書書とといいふふ
 数数とといいふふ。ああれれよりより風風雅雅ををたたすすけけるるや。風風雅雅ののままをを
 助助けけるるや。いいづづれれををくく。そのそのままままににむむ。むむののままをを
 考考へへ。一一とと。年年ままみみ。かかたたるる。いいふふ。まま保保十九
 甲甲ののまま。初初のの夜夜末末乃乃四四日日。病病ををままててまますす。りりぬぬ。予予

存く。其の教ハ稱せらるは。文章ハそのつらく。

古人がいちらす。いふは。やましく長生解湯女説或ハ

霜葉歌の一章ハ子を止る。其つまをく。柳蝦ハ乃

一冊ら。其を持るの憂をあらむ。

養記夕千紀行を除て。杖活予の類。まハ柳葉乃

まあらすも。又坊のの絶をく。さら

数といふ。あれより風雅をたすけるや。風雅ののまを

助けらるや。いづれをく。そのままにむ。むのまを

考へ。一と。年まみ。かたる。いふ。ま保十九

甲のま。初の夜末乃四日。病をまてます。りぬ。予

莫逆乃交、くまうくまう、くまの秋、くまをすめれ、其書学の言を尽さず。其壽考、葬乃其を惜く、く。疎り、ぬの、くまの、藝林乃数子加ふこと、あ。

天璠諦流瀆師傳

照晃法師者、其先天兒、嘗傳神世禁厭之法、奉仕諸皇子、被愛寵、賜土器、孫裔相統、稱御母子、婢子現、女、躰立、婚禮之、躰衣、錦為、榮、其後、陰陽耦生、躰示己日、被之遺風、然此法師者、雖身代草之種、假楮國公之姿、為婦女、乞日和所鈞、洞房西廂、端者、悅晴景、隱逸之精乎、而形集卷之十七終

俳諧而形集卷之十八

東都 解庵 皐月平砂 著

文章

哀辭

哀春雅翁文

在竹堂乃主春雅翁、五味氏元、和漢邪道、尔精く、仁愛の心ふく、質素に、て身をかき、く、風雅乃一す、ち、に遊ひて、三十年、其邪道、の流行、い、仁きり、をく、我師、素翁の、風格を、稱して、秀句、数少、あ、く、中、も、二句の、可、く、い、あ、む、き、る、あ、。

さうふ。きみらやむひもやまうらす。物おもひの情はおく。
日ふもをんやうとやうとさ。やうりくか。こは
羊のをもとめらる。かくてこのものを伝へて傳る。
の靈ま。よきを。報恩は一向と享ぬへう。

逝水哉西尔歎久也雲乃峰 昭享保二十

年乙卯六月望二十七追薦日

哀東舎其蒼文

箕輪氏に蒼君ハ。蓮谷觀の主弘武弟也。其いよく金
や。わして小温和の色あつて。うちに伶俐の光を舎
めち。そのつら世務小推わたりても。美ふをうりる

さるりち。俄ハいきとより餘力あるに何せて。先師
乃門ハ羽翼の弟子なり。されども二角其角乃一字却
かちて。正風の名を定められ。其人をりて始とらふ
る。いづれとと兼睦月乃いぢひより。まき病よ
枕あつるぢりあく。さつたす衆のハ口とこと。短夜や
おのれも夢とらうこと。まきの実をやをうけて。
はあま亡門人の救よ入ぬ。すまをこきうて發のく
日ハひもあつるもおくれぬた。いまその時れあ
ま。その。世のあをまうらうらも。指さひまをう
れとるん。まうてられ。一句をまうら。はまて風

騷乃こころハハチ多程きわしよと。ひびくしつゝま
きこしつゝ我は香れ。まふとに比門の先をさしり
むくすゝまふを朽まれを御保。元文二年丁巳
六月十六日

一廻向友如く勅を扇加奈

哀凌雲館小女文

城南の里長蓬洲田氏。もとより笔墨乃こそを好む。
うねの筆宛あり。すゝき目めとあつたうら
まろみ祿よけまゆおひささの程よりめよりそ
ひひやうまふ人のむきまらんこころ新心。まゝ
惜まるゝゝもありあま。さねを月日と美事

も好く。まゝ一六もあつた秋をうらねあれを。
かゝるおはきもてもち急はまたらんあゝいよ
父をまゝまゝのまゝいづらまりて。こらみこた
あゝこのあつめ。あゝのまはの猿まなわつ。糸
よは女のよわさを忍びと。おちるふらさりあど
人いあやゝいあゝ。まゝのまはの猿まなわつ。糸
あゝのり。門の外にあゝまゝ。いよのゆきするをほ
あゝあゝまゝまゝまゝかた。又あゝまゝ小洞度まで
も。かゝらまゝまゝまゝ。あゝあゝ。かゝあれを父母
也。於舐撲乃愛まゝあゝまゝ。さうくして秋も

まねくか成る。考もむるははくのゆるまり。はくは
 心の衷心をと感と。誰の道の凍もはくは。とやいそら
 あるまもこを証せ中のちりりり。あまうにうちあて
 こふねのきくは。ちりりり。あまうのきくは。あまうの
 のきくは。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうの
 に。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうのきくは。
 おうりて。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうの
 ありす。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうの
 さ。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうのきくは。
 あまうのきくは。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうの

あまうのきくは。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうの
 か。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうのきくは。
 ら。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうのきくは。
 ひ。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうのきくは。

子代あへき。菊もうつろ。あまうのきくは。あまうの
 い。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうのきくは。
 と。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうのきくは。
 ひ。あまうのきくは。あまうのきくは。あまうのきくは。

年月字神言と品と曾影ひ仁志
 やの氏高天介かへ流宇社之伎

死をやはらんし。亦三そ小生死を忘れけ。力さくく
 めく、さたよきを。歎きせつ、すん、惟る為るく。いつく
 いまもる。此。是骨肉の遠穢ちらん。あきり力乃中をこ
 るぬまを。かひて病邪のいしあひもなく。世日の曉
 おあけらるるく。いさきくぬ。年いさちあまう三なり。
 全家れあひいひいさちりあく。よまの夢うけ、たるり
 中に。知考のく。葬れゆ。いひあ。淡草珠島山籠突
 ちみ、さくく。その墓あり。よに別院澄月師を。
 多年に方外の交ちれも。その辱きもむつす。からん
 と。すくにも日此夕より。かこま、送也侍りぬ。寝まも

を。世名を播まねく。繁譽昌運醫師とまつけく。いま
 けく。とく。志願をねし。あくる日。新。きかきりあを
 さひす。けわものうも。悔。み。さ。ら。り。名。跡。を
 お。い。て。か。あ。し。涙。を。さ。る。こと。の。歎。き。さ。と。む。へ。き。人
 を。て。ら。む。む。ひ。て。ま。さ。り。あ。ふ。方。あ。く。も。日。教。を。お。り。ぬ。
 予。父。お。お。ね。く。より。あ。に。悲。ひ。を。う。く。と。十。三。を。録。七。を
 五。や。葬。者。あ。い。つ。り。く。る。は。汝。を。る。る。お。と。我。お。の。み。れ。こ。と。く
 す。と。ま。れ。ま。こ。り。い。ひ。の。怒。を。さ。せ。す。い。あ。ら。た。せ。抱。よ。ま。る。や
 て。子。を。愛。お。く。こ。と。く。ち。あ。ら。我。父。の。こ。と。く。け。ん。と。する。あ。て
 ら。れ。より。い。あ。あ。て。これ。より。い。り。も。た。ら。し。と。い。ち。ん。

まゝの又一時の心をたやすうにめされを。没後又その恩
をいふ。いふにむらひにたふさや。何うしては罷をのれむ。
らつたれ日のいあやまらさるなむ。霊牌は向ひて悔ま
ともいひなす。その書を初七日の日向とありぬ。そのりく
くつししき詞を捨て。狐の末をさひ。やまのうらやうひ
をさるまことあらむ。

名の木ちり移る。勢鳥乃をさぞ

享保十七年壬子九月二十七日一七日廻向百拜供之

哀僕元助文

叔父隆徳。僕元助。野州那須の産ありて。百六歳の祖父

九十と兼の父。八十餘兼の母。四人の兄有といつり。今十年
あまりさきまや。自來て仕へんも。戦ふ。されたれ。その
事は何するに。幾つてもむらひ。あつてもよく。遂に
つる。人のさむをいふこと。あつても。争ひの端をさす。い
を性乃。静なるより。小細工の二能あり。すんで。いひの
おと。縁するより。屋の漏。壁乃破れ。るも。假して。さ
あ。か。お。て。を。終。の。匠。を。ま。す。中。も。兒。女。の。遊
ち。う。己。を。樂。む。の。造。り。物。あり。其。作。為。の。始。と。い。ふ。
錐。と。袂。の。純。き。を。た。く。も。ふ。先。紙。ひ。初。め。を。い。ひ。す。ひ。
そ。縁。の。端。を。さ。う。に。ら。ぬ。き。又。す。記。る。お。ひ。き。と。あ。し。

はめて知。

犬蓼や飼れぬ孫のたむけ花

寶曆十一年辛巳八月二十日

弔文

弔午寂翁 香山野先生文 又彌水竹居

一鳩林午寂翁、密井門の一人あり。突妙子白中、
よわとと修を於れとをた。必此翁も問て推敲二、
乃窓を定めくころ。ちきを此門の書篋とありて、
一日の餘閑を樂まはれを。貴む一懐脇指と。同門乃徒
も力を傳て。難陳乃歎歎やせきとせしと。町の人を傳り

傳しぬの焦尾琴乃詩仙ルかけらや。その教示より潤色
あて。俳諧をもとく詩とくの始なるん。凡諸集の首尾
おぼてとよく其事をせぬで。いひ真字やいひ假名と
いひ。引て通ち。解く哉ふた。翁没志て斯、文格なり。

嗚呼夢ち哉七年于茲 寛延元年戊辰 十二月七回也

序跋の惜まらぬ也煤はらひ

弔桑楊文

松葉軒桑楊也。世に書肆乃名あるものにして。蔵
版の目も数多し。予の所蔵たるもの。おちく此もた
ちとよわおめり。なほ。没ほ乃而影もあつたらし

史をてうか七後ひちる所をのきむくるをのき
史たちと行ぬ 明和元年甲申正月
二十九日七周

史をてうか七後ひちる所をのきむくるをのき

弔拾翠文

拾翠子七回忌也ときふふつけて我業の附の日記
をうれもけ史の嵐雪十七周をともうへる可。廣業と
いは集をあめり業の集をふ傳いて。よ役み
助をよむけ夢と成り四十あまりとせのむ
ふくく師の史を預りもあふ予の聞かす
ふくく史と返後の可あはいと毎は返のこをり

あつすわを丹によせつくるを抄しありぬ 明和二年

らり云ハ口のみちるなり

弔桑翁三十三周文

桑ニ畔乃翁六ちちりまの春。史を子れ廿五回あつる。

享保十六年辛亥 花梨砂雪越片もねるといいて。往を惜み

米をを嘆き。予と史六ちちりて。業をの冊之回

城をよ。今法柳り。雲をねるきかう。純史をき

す。史をよるこふ。苦吟きく三句。積年た救の餘を充は

乃。若五十年忌る。史をのすけありと。松をね

悲しひ。門生の次韻おわす。史をねる

ふふ事の本尊の立よ宿乃秋
一代記の如く速夜の長ゆし

師や箒を易いとき予は竹空子ミハカキをあしよ其意有や
無やち〜のあ袴をカシ花く〜のな開き石む心裏
痒〜

兼て鳴人みしく秋耳掃除

俳諧而形集卷之十九終

俳諧而形集卷之二十

東都 解庵 皐月平砂 著

文章

祝辭

初春口號寛保二年壬戌

面白乃四方びあや。門あな〜ふは松と竹。治神系
世の祥をあら〜あを。かち〜ぬ子代の友をき。青
陽乃氣さ記す〜れて。今朝むく記又踊を〜り。
傳〜肉考菜子ら。い〜から我ねやま〜ひ〜。飴寶
引の甘あ〜をよ〜り。糴煮い〜を〜腹鼓繪双六よ

袖らわらぬ。惠方みわけしに有る。あつゝ酒の宿り喜。いそぎ舞人あつゝいあつゝや

ちのまや母小わくくとかう寸さ

慶壽聯裏書 聯語出萬寶全書

酒泛金危。真酒多。浮嘉酒。

酒乃泉菊を湛へ。呵尔事。りはあ。り。の友。面の色。片。碎。を。多。く。底。抜。市。を。身。楊。子。は。市。

星輝南極。後。星。光。照。德。星。

星。林。を。花。を。り。い。喜。め。く。や。彼。神。の。光。露。乃。塵。は。と。れ。と。是。せ。あ。清。真。山。城。守。龍。背。の。山。

自序

伊予へふひく莫之致而至者命也。歿壽禍福の自致なり。言凶悔吝のかきりく交せる。易きに居てこれを俟。唯小ちくち正一紙を交。実なる哉。予性巖壑の危。有て。青雲の志を抱。藪深小枕の好あり。一。亦。是。薄。命。の。な。せ。る。処。な。り。し。わ。つ。た。に。生。理。の。そ。を。終。不。始。ま。り。間。を。方。を。害。の。吾。幼。う。て。聞。け。祖。父。昌。順。姓。石。川。名。隆。權。丹。州。又。出。糟。尾。一。家。の。醫。術。を。傳。へ。東。都。に。来。り。て。官。醫。瀨。尾。氏。小。瘍。科。を。受。越。の。大。野。侯。に。仕。へ。箱。崎。の。小。岸。に。居。次。三。子。を。長。と。昌。傳。名。隆。と。い。ふ。

二女を波琉といひ。三男を昌運名隆といふ。天和壬戌の年順
 没す。時に傳ふに。父の業を従て君の為を寵き。其
 年。陪從志て越列に往來す。母家に在て其行を患ふ。
 哀みてやまの病する。あつて移る。禄を辞し。退休を
 孝表せむす。故宅をすて。鍛門外に移る。瘍科を弟運
 又竹人内科と專として治を施す。二子あり。長を大吉とい
 次を徳次といふ。共る。殤や。其及小進をす。十月四日也。
 云。進る。平砂の小名あり。又其家の東。稻葉街に轉徙す。
 予漸七歳。父藥名を著へ。書題を誦む。父をこころり
 字。坂竹洞人見氏と受。其門も。あつて。書。ト幽叟乃

東見記。千里氏の本朝食鑑。桃原先生乃手書。千文。あつ
 びとあつ。許情説文解字。惕齋訓蒙圖彙。ちと。あつ。り
 篋を再び。快哉。教し。聞を。おん。為となせり。八歳の始
 より。句讀の習ひ。や。おまれ。羅山字訓。並の詩経をもて。
 自字を。指て。讀む。其。中。や。舊。まの。手澤。あつて。子夏の
 序を。写し。入る。あつて。あつて。あつて。あつて。衆を。用ん。の
 意。ち。あつ。九。系。此。表。より。して。六角田中の二氏を師と
 て。八分と通俗の字様を。習ふ。明年丙申。父没す。故。又
 叔父。運。家。に。あつ。時。小。六角氏。出。て。仕。田中氏。業。を。承。り。
 因。て。平。田氏。に。従。て。首。藤。門。の。書。法。を。學。ぶ。此。叟。竹。書。函。を

能く。又談林其借落を傳ふ。牧漱石とらふ人有重頼。右風
を守り。二子とてふ去集を。予借落を初の始なり。高李侯藤岡
龍高斗橋諸醫ハ各長する。予のあれをて。予講席より列の
を説き同くむ。此はよく此道を精研して。亡父の事業を傳く
よとなり。其外詞林の交りおほくも。世態を志すの一端なりと。
享保十年己巳冬桑。畔此門に入志。時年十九。みつゝも。毎小
吟詠して。炮炙修治の勞を慰やむ。一日杜仲城判むと有。
皮中の張絲綿よりして。右は倫を左は參まり。断は既て盤を
くくわ。飛泉のみふきり流るやうなれ。山水遠望にたす
らん。元結り水樂もこれな。ちらんとうち。ア。より。志きり小

茶刀を穿つ。ひねるとに。誤て左手の中指を傷りぬ。血溢れ
る。流流。發痰して神を失ふ。手はる。休むを悔
お及ふ。瘡て好肉を生ずれも。采氣の行あるを志す。ひ
芝より人の脉を診んふ。其右関の候ひをる。さうん。おひ
かくさを自欺く。ちりと。あ。おひて。醫とあ。ん。心。ち。変。次。
あ。と。そ。一。川。の。長。ま。る。事。あ。き。と。ね。お。壬。子。年。叔。父。は。お。没。す。
詳三五。予。又。い。く。も。あ。く。は。ま。家。族。お。別。れ。東。西。お。漂。泊。を。属
衆。弟。の。送。弟。お。交。ち。り。た。此。一。す。ち。に。ひ。月。を。あ。つ。る。さ。れ。は。ま
徒。の。新。き。より。こ。ろ。を。今。の。業。お。居。ん。あ。を。初。む。より。そ
其。門。の。言。弟。超。波。お。因。貴。志。沾。洲。の。席。お。初。て。元。文。初。元

丙辰年四方萬吟の句を請求。評者二十餘家の列又ハ
 ちりぬ。あつたよりより十句を経て。會同は友間あり。
 又ほあつたを以て。ま餘の回交も皆物故を以つ。二席の
 上を存く。自百端の事をささる。予初の志を絶す。あぬを
 む。して時を得。すてに年方とちとあれ。閑逸の心
 まのくせぬ。明和五年戊子十月列席此牌名を闕て。
 三四輩とよみに隠れ。きれと顧問の客後さる。あ。案頭
 の業をすつる。とあつた。積年の旧稿をとりて。凡例乃如
 論次を定め。書又臨むに任あらん。ゆきをわりの媒と
 なりぬ。初ト並まらん人有り。予生年月日示あを移て。

其年の卦を考は。姤の九三小あつるよし。易曰臀无膚。其
 行次且属无大咎。子夏傳曰。以其不獲也。而止於位。故免於
 争競之患。危而无大咎也。これを以て。これとあつた。
 志をゆるして。さまりし。天数の危を以て。陽をり
 して。あつた。かりん。い。百の醫無膚。此三字也。吾一身の
 情。ことなるんも。あつたに。諛笑の意。小か。あつた。其。辞を。し。も
 あつた。い。さ。ん。ん。又。前。は。毛。詩。を。讀。て。言。の。發。す。ま。ま。を。激。あ。ん
 記の聯句と。あつた。言の狂。して。對。を。入。ま。を。知。は。か。ふ。業。物。を
 身をやつ。して。杜仲の道を得。一。名。を。疑。は。さ。ん。か。ね。て。変
 化。乃。理。を。含。み。く。作。業。の。兆。を。あ。つ。た。あ。つ。た。あ。つ。た。あ。つ。た。あ。つ。た。

平砂集卷二十一 自序 五 平砂集

天命既定ぬ。父恩をさす。こころかくも此身を立て。孝の終と
 ちすへきも。まろ浮言の虚名を弘めて。父母を顯さんも
 恥ならめと。ちまて慈愛は道あり。をいそせおの
 心をも。情動於中而形於言と。あへらわく一句成
 忘れず。よまてあつけて。而形集といふ。是ねのつくす
 四十九年すの言も。天地萬物は景情の係ねと。ゆも
 造化乃奪ふふら。ひを。ほつたのまの情性の咏を
 らめて。松風乃獨吟するは。あまのささるんも
 形和七季庚寅之月。東都布信。録菴主人平砂齋
 於後園第花林之中



俳諧而形集附録

東都 解庵 皐月平砂 著

諸家發句 併次第唱章

春之部

歳旦 喰摘やよろいさいさふ 掌 帆詠舎 同惜

子日 大まをに出てもさすは若菜かふ 帆詠舎 莫大

人の日小鶴もほくも野の若菜 帆詠舎 暉牛

雪薺所も粥ちとよゆるみり 帆詠舎 白抄

梅 年玉の田舎へわつる梅尻くれ 帆詠舎 東澗

梅咲てわつるは梅木かな 帆詠舎 田注

出心の宵いまこきー梅花

薪江

熱飲う管こるくわ梅又札

女 五嶺

不ころひを梅いまこきー初春すて

女 百合

梅よほへ烟草香ちりー館國府

白清

日時計よ巻けりくわ梅々宿

乎川

梅枝斗花のいろはや塵埃

女 秀億

日尚里小籠足初る柳りか

女 柳栗

考やまのり白日も餌扱小木

仙臺 砂柳

うさへす不付く回るや名の考

曙鳥庵 緑水

鶯や梅の枝うさ黒拾子

連砂

鶯柳

猫妻衣

考の初春ちりーやハ幡山

兵貨

首玉や猫乃心りー後着

流窓

薺花

節會もあいて菘咲薺系南

同情

言

流す日けり柄を落れ鸚鵡盃

卜豊

花

籠の酒大内山乃麓のち
名のりぬ我子いかに花の主

鳳翠

非よ系佛小系むさりり

一塵

嗟我芳野名の三社や上野山

宇雪

梅

松一人稍小黒ー山梅

班曉

々々日よゆやくを櫻哉

仙臺 東溟

是弱乃山娘も何そ逢 橋

并奈川

範路

猪猿の尖氣もちく山様

其帳

山さくく人のとりなかり月夜を逢

羽貫

雲水の返方を遊ふや汐干瀉

桂子

海かす目當り灯をばくく於

桂舎

谷風のわとちさくはく胡蝶哉

虎睡

張須のみまこ頼ぬくこてふ哉

栖礎

やふ入や一 句も元の故とるは

三溪

姐叔のみお打者ありはくく願

萬林

白飯や松を包まぬ雪くき

宴州

藤

檨棚

也不入

蝶

踏躑

汐干

雑春

志し妻も古酒入や壁中茶屋

渭舟

元文年中を國よをとりて

京南翁

妾ちねや夢ちるは 百姓流

律山

東雪や柳も跡も吹い少し

成美

雉子鳴や歩はぬりは 畑乃土

龍成

海隣舎

彼岸中持仕也いせそ 橋かた

尔來

春雨の門より疾風斜らな

橘洲

名に立やね云笑ひ孫生山

東谷

垣へ来てはわく身や 妻おのみ

莫大

暮音

宿月山

春雨

桜

雉

柳

才多之部

翅 朽 毛 枯 赤 下
花 心 和 紅 多

秀丹

御字稿乃まゝ彫刻

更衣

綿ぬき七秤ふか、乾角力取

萬林

卯花

卯花也、苧莢の垣根奈良晒

初秋

若菜

あけちのち、ちぢるすわうも外

貞風

郭公

麦葉み笛をさへてちぢるす

乾路

きのこまで、ちぢるすいり子規

介來

牡丹

方丈の居るを、棧敷又ほらん哉

莫大

杜若

玉川に、ちぢるすとてや杜若

宇雪

夏草

夏草や日照るまけぬお撲る

田注

牛島のあゝのち、ちぢるすいり子規と木母の事乃ち、ちぢるすいりて

あまのち、ちぢるすいり子規

栖礎

和堅虫 ぬふ脊出てほり仗也若鏗 秀億

廬山のあそび

五月雨 五月雨やせめて廬山を草結庵 鳳翠

笋 筍やあひて洗ふ若石乃 東澁

田植 岡あを子ハいゝて田植お 同惜

雲峰 頂上へのちる暑さや雲乃峰 薪江

茶屋あけて物を疑ふやの峰 宴州

骨絶の車力は声やる雲峰 渭舟

白雨 申あつたをき極うへへ松の交 友子

一夜酒 世訓たる女杜氏や一長酒 橘洲

納涼 仇み少恋慕虚空乃きく決臺 帝睦

清水榭 切株小枝の樹枝まや夕涼 其帳

蓮 春秋ハ波ル致君て清水武 卜豊

蓮 白蓮や悟り切る位ととろ 五嶺

綿花 言安の里は志をりやわらんむ 砂柳

秋之部 牛吞

稻妻 いかづちを市小きき橋を踏うるは 田注

一葉 物かけと硯へ落ふ一葉うら 成美

老うるのまろもとたに小を市りて

葬

あさふせ水の流してひるねり

徳山

萩

第目に萩も能く夕かた

秀信

女郎花

りてて一時をりきききき

女 緑柄

芭蕉

をば蕉紫や夕の香も初たら

女 百合

虫

羅の先捲ひあり虫尽し

桃佐

七夕

誓の子お救や袖寄し

亀慶

七夕

きあをこや寐物泣をけ夜より

同惜

花火

水や空吹く此一杖の酒棧嬌

渭舟

花火

笑うち小籠と落り花火引

五岩

踊

文由杖や踊おうれ子よむ

其帳

生身灵

國許と松又友あり角力とり

东許

父母かぐれ

響し一猫みかこりすきとな

暉牛

霊祭

灵棚のまてハ佃此藻屑も

吟翠

薄

逝水乃流をきこふいと薄

橘洲

案山子

香ちり守る心花のついで

仙臺 山峽

鱒引

二つめハ細工のおは案山子を

弟林

鴈

秋霧の底も子為や鱒 綱

兵貨

月

舟焙ふ火も夕くらねの色

羽貫

月

名月や渡天もすへき海の面

蕨江

月

明月や窓より内は水守

範海

夕々や冬も過て外の村

冬溪
栖礎

桂月十五夜三候平丁舟を泛ゆ

名尔とる月也之浦と波乃上

龜菱

菊

尺せまし此菊作て也隱遁者

蛇水

花野

師の影を踏ぬを迷ふ花野哉

尔來

鹿

那胡以才か深し鹿跡考

丁東

紅葉

あれまるとよむひるけり紅葉哉

莫大

後月

雪まきへ空乃み跡を十三夜

桂舎

冬之部

初冬

十月や雪吉のゆたきき鬼子母神

流窓

時雨

舟虫の滞て居もやむるをれ

五峯

落葉

一川家枯むる目も立ちを死

風翠

枯壁

艸枯て野館の角信曲み哉

滋州大垣

紫朝

遯世のうを氣もわたり枯壁哉

田注

大名新志らぬ榮華や多し守講

萬林

水鳥

水鳥の渡ふや池枯丸木橋

滋州大垣

宴州

千鳥

佛をも割むへん長乃浦

青巴

雪

元来もち不遠分幾つ雪の居

砂柳

一日乃隈なく昔川若杉原

葩路

兼善	鯨	冬至	頭巾	炭	大雪や汲ぬ釣瓶のおぼろり者	雪深き聖末弥家や古龍	きましくに雪のうらみまじり地
兼善	鯨	冬至	頭巾	炭	何國人耳も頭巾の壁障	七里の椀も茶碗も鯨うる	我内を大きくするや煤をくひ
兼善	鯨	冬至	頭巾	炭	井の地小一陽強し冬角抵	鯨鯨や玉あよりも拍子物	我内を大きくするや煤をくひ
兼善	鯨	冬至	頭巾	炭	七里の椀も茶碗も鯨うる	鯨鯨や玉あよりも拍子物	我内を大きくするや煤をくひ
兼善	鯨	冬至	頭巾	炭	井の地小一陽強し冬角抵	鯨鯨や玉あよりも拍子物	我内を大きくするや煤をくひ
兼善	鯨	冬至	頭巾	炭	七里の椀も茶碗も鯨うる	鯨鯨や玉あよりも拍子物	我内を大きくするや煤をくひ
兼善	鯨	冬至	頭巾	炭	井の地小一陽強し冬角抵	鯨鯨や玉あよりも拍子物	我内を大きくするや煤をくひ
兼善	鯨	冬至	頭巾	炭	七里の椀も茶碗も鯨うる	鯨鯨や玉あよりも拍子物	我内を大きくするや煤をくひ
兼善	鯨	冬至	頭巾	炭	井の地小一陽強し冬角抵	鯨鯨や玉あよりも拍子物	我内を大きくするや煤をくひ
兼善	鯨	冬至	頭巾	炭	七里の椀も茶碗も鯨うる	鯨鯨や玉あよりも拍子物	我内を大きくするや煤をくひ

年の暮うらまゝいそひ尋

莫大

戀之部

西海の内渡家の女十四歳村よりをちれて后とちれりも
あまの子代あまのちりまてのよをいぢりて

西海又確り由あり初施乳

龜菱

出かまりの末乃珠名や上総舟

巨津

羈旅之部

水巻路

雨雪乃ちきれ雨や杉若蟬

東里

淡名既在

海原や淡名をわするハる處

龜菱

神祇釋教之部

あとしおの秋ハ稻荷の半りよ花

初秋

悠かスー 提長帝に執化佛

貞風

関帝の祭祀を誓す百振して

法の程極て孝子や下苗株

龜夢

雜體

雜句

そりしや初さく 調初相魚

回

浦マ我志をく 海東浦古

回

中京致時長梅をさくこれをもよおをせて柳の枝はしるせり外原不
老の影けの山を柳の枝はさくせり内はさきと京式といつり又宗祇法師は
さくせりをよおをぬ柳かと
さくせりわりのさき

本歌

咲せく 梅とあさく 柳の乳

新泉 回

等唱句

春、日 心 浮 立

新泉 文國

入 梅 傘 百 斤 牛吞

廢 承 三 五 月 同

對句

巾 置 額 士 歐

衣 纏 襟 坊 猪 大國

短篇

逢 寸 笠 もぬりせ けかき 其邑

むより 待てま 梅 流窓

辨の藤も 著る 磨も 平砂

戸中諸子各題之頭字類以以呂波

いさひ月	舞鶴や一度極めて祝ひ月	仙峩
いひたこ	飯蛸や川に精けし破法あり	洞枝
いこのり	おり際よ木の間透くや風中	千砂
	定紋と親けやまゝ流し乃不事	田沙
	休む日もあらし才流紙鳶	川旭
いさつま	稲妻の寝合せや水乃影	餘昔
いね	船舟やれり門田のをき馳	平汐
	い初干也打ぬ古枝もある時	井花
乃ひら	燈用きや深枝を心喜の風	可友
はつめ	初爰に及り波君の舟は足	三好

けきのち	人ハ彩仕に織され花乃去	平汐
	皆人の玄紫に咲やむの巻	千砂
けつこ	人もかく折目正し初曆	餘昔
は那	垣尻を返すも似つらん墨の香	墨川
	種よりも物と居れ花 莖	平丈
	らんこわき花は伎をる墨	箕山
けくのあ	百姓の小そめ種や春乃句	其樹
はき	ハ月や山又破る川波	春里
におさけ	箕の形不為て味をさる新酒哉	砂益
ほろき	少人のあしといふるや部	砂迪

あつり	谷川の交も足すてぬ子多哉	平丈
あまき	人のまに尹結紫ぬる粽かふ	餘昔
まんごう	龍膽や若れを紛ふ笹の月	井花
ぬちを	刈せりと秋を採ぬあまや築ち	砂良
るこう	露志くしあまを縷ぬの旭う布	平次
をさう	又赤くと梅の廣くなる踊うれ	著明
を	連て立簪を足さねめ鴨かお	砂曉
わうか	内裡へもよきき宵戸の若菜哉	為文
	くくへまを足ししも足も若菜哉	宗楓
わうを	水着の木末へ登ふ若葉哉	平丈

へにのむ	氣みくぬ人もるへへ紅のちか	平全
さあつた	外よりも内焚まもゆき去羽千	春里
うの著	赤家の居るか立くり年於市	井花
	松一市、流一年、柵	為文
	ゆく食也既も位を指小取原	餘昔

かすこ	賭小一して松乃笠よむ霧哉	令砂
かり	初彦を一日ほねや市位君	砂迪
かつり花	後玉氣の滅果小より均花	砂益
かここ	我茶をまらぬ教有り紙子黄	砂迪
かんね青	試みる捨てたる世や幸念佛	砂曉
よくハ	重急を存むるまへ山嶺外	平臺
たかまを	心たのむ悲する星は物おと	砂曉
ねんけう	連翹を隅の隈にや産後鞠	餘昔
そまを	無云代ふせをなれども落裏花	百轉
つき	漏る方一容座さうせきあ月	八虎

山乃端又定三月也	為文
水向の物名もゆり今日定月	平全
名月や智者ハ固海具原	苔雨
名月や杉も油の遠る有利	柯貞
名月や兔又續くいふのあ	大牛
名月の千尋波や艸の上	其樹
名月也舟ひく園の笑ひあ	平峨
ねふら	川旭
なひら	平章
なひ	平汐

常列主浦

らに 神植も養生のひつ 蘭乃もか 餘昔

むめ 茅垢乃ぬけし木よりや梅忌 苔雨

曙の夜抱もかすむめれを船 巾砂

鶯も三枝のついで梅見代 富砂

浅すもよきを梅の奥産浦 砂丸

うゑす 鶯此梅よあぬ日や遠歩り 砂迪

おのこ 鶯や神くら梅一身刷ひ 平汐

のち八日 卷曆三の亥女子に追はる 砂邊

のふえん 駄みてえをゆ寸声やほれ月 川旭

後背をやりておる木より水 田沙

松を丸 三月月おあしや庭の初尾志 砂山

くつじり 罽少尉は捨る気はなう楽むし 砂曉

くれのあき 若紅糸よりすうりてるり杖や 平枝

やがとき 本町にあるきめのを糸柳 瓦高

まをや 地の声を浦姑うきや松籠子 井花

けえ 一海に猿守糸や毛見の宿 百疇

あつこき 遊ひをこころを松め古あよみ 平花

こまき 竈る此初るるや髯の捨る総 な枝

えのほ 回ゆる枝乃かまつハ音既その 鑿書房

てふ 水引の平場をまねぬ胡蝶哉 平徳

あけの巻 又一川さくさく 菜と卯の巻 田沙

あきつゆ 飛町のすうこにこまる 蟻喰が 平文

さくさく 山茶をたたく 鐘を撃ひとら 來茹

さくさく 峰の雲をたたく 鐘を撃ひとら 百嚙

さくさく 賣茶も物茶の次や 搦草 平枝

さくさく 長栄さよ田又たけり 剗の巻 百砂

さくさく 菜園のむくれ 麓や志しれ 東砂

さくさく 東人の破ても 漢如菊此詔 莖砂

さくさく 伊きけ さいの巻 さいます 那智大滝 砂益

さくさく 天竺山 山間の宿士いあま 君解片 浪華 砂月

ゆき 白雨や山のあまみ 昼日中 瓦高

ゆき 元や水物をまらせて 積る雪 苔雨

ゆき 初雪や牝牛の角より わら 富砂

ゆき 血縁をも下戸あつ 遊よ 雪見連 八虎

ゆき めかり ありそく私布刈の妻や 禪のけ 川旭

ゆき みのね 衣食住揃ふや 三の羽 搦草 平汐

ゆき みうん あつる 衣厚の仗や 枝密 棋 田沙

ゆき 志ま 一口を 古く 清水哉 平枝

ゆき あま 雪折の 斬る 霜 柱 同

ゆき 急ぎ 恵比須 溝遠り 遠やふとのつと 平汐

ひん 捲捲も勢にうなる破者か 其朴

ひかき 破きても空をばく日傘花 砂益

そみち いろくの法はたぬ紅紫る 富砂

まらき 餅春やあのかきいひの功 三好

せみ 富士のや産美ぬいしや蝶の表 巾砂

すまき すすまき板木の上を蠅をらひ 平汐

京 英国よ花乃姿や京の水 砂曉

一より百千万億載も通して津をちかめて小文花よまそく侍田に
うつててこの紫いろき勢舞を美せさく人マアうらめて衆老入
にあんして男松系の一ひも守られは又平所おのちしもの名も
傳ててこれなぢとて四十の今同門人の立程うのふに加さうて世
もかろ声はうそ
ちやせるなり

一彼のままいーとすの田植が 其樹

いよみおをれを又いしうしきる

夫象あるそのいも性をあつちす象有て其性をもさりけりハ
いふつまぢりそのをてそれ端みかやまて不そくたさヤハ
ちりともハ風流もみれともそれ岸一又山海林野の梢とて一
雷に光をちて光もれをさか人影倒し魂とけし怖しけ
風傳あれともさあさアちり光をかりてハ雲影の乃れ物けと
かなれり函くときハ穢りのことく徳あるさだハ佛相みかこる
秋風ぬれより耳あり動くときハ猶孕むさく他は又傳く
も妻の名によりていひ出し一もあらん予をこそせあまり
ささくはりこありの松原をかくる
より一松とてまは包せていひいてぬ

稻妻せちとて染はり川又香川 貞喬

大人の足は又是あて福喜草 井蟲

月花や鳴り流文句塔 供養

釋 孝通

蛭猫とあひてませとよひかひよと教ふ凡多をもちこころに六年

秋の萩も及吉いちちりし猫の国 女 水永

慶賀之部

我師園花林老人隠居するうへにたれ今や道ちりそよへ

壽隠栖 六名の名所あり次庵の月 為文

句を積むこと丘のふくまを採ふこと測れとや

壽集成 珠むろ小年の湊や志川心 曲江觀 馬陵

壽刺成 檜木や華ちる文を聚め版 八虎

文章

蟻頌

渡富砂

蟻よ。汝遠粟粒よこされも。心ハ玄駒の名よ恥きくむ。
造るふ千丈の堤を壊はてしむち。いさより起て大よ及つ。
おろよは性をうらの大なりとちちり。あり群をて食をおめ。
あむむをて塔をくむ。れを放き、救文の梢よ登り。んを
拂へまかへの穴に隠る。方よ胡蝶の文采もなく。只素女
清音もかきた。又玉虫の糸とあらす。尻よ螢の光もくね
こころをかくも人を慰む。東郊冬竹橋を修り。晋よ天の
旋小ぬとふ。古今又汝称羨多し。さしは法密詔の患を逃れらる。
そまのやかの君子よまへ。白雨よ教をや蟻の依持

八寶說

岡為文

一曰隱蓑隱笠。夫蓑笠と雨衣を凌ぐは具にりて農夫漁翁多く用ひ。然るにこれを冠て容貌他小なり。故に冠を冠て蓑笠を冠て。今おろし王子公孫も雨衣雨傘に飾り。蓑笠の卑劣を忘れず。耕約り勞を憫みん。仁也外より窺ふべからず。是胸裡の蓑心。笠の笠をて。一たひ覆ふとき。万民の突とまへ。二曰延命小袋。詩人錦囊有。醫家に青囊も。大寶といふ。入る太倉の府。和川志て。久曾和太布久呂と稱。飲食と節すれば。破ることを。是延命の寶也。三曰打柴槌。是も欲する處を以て物とす。ちや。是其具有も。何の宝と。爰も君子あり。心は彼蓑笠を。是も。是も。其小槌と承ん也。

四曰寶珠。四圍より。金石の玉也。是石決明の含める珠也。白圭の玷たる。尚磨つへ。只君子の徳に比ぶ。仁心の潤ひ。賢臣を。其用。是も又宝とせさむ。五曰宝鍵。君子は金庫を。稼税の為。是も。為。是も。満籩の金。斛の粟。出入時。有。用。度。有。奸。者。私。す。其。用。を。失。小。の。破。一。種。有。て。か。る。屈。曲。の。形。を。有。ん。也。論。是。用。を。待。是。宝。也。六曰分銅。用ひて金銀の狂きを。分。權。衡。平。に。て。民。用。調。小。宝。貨。中。の。一。疾。成。へ。し。七曰米字。粉米乃章を。西。七。寸。古。篆。の。象。を。書。す。む。也。百。穀。乃。長。一。日。も。は。君。も。あ。る。也。美。肉。熟。菜。食。の。氣。は。後。者。の。藪。ま。合。ふ。也。劣。た。る。也。淡。て。味。ひ。も。さ。る。也。宝。也。八曰丁子。丁香形釘也。口氣。治。す。御。史。を。合。て。事。を。奏。す。の。也。宝。也。稱。す。也。是。も。君子。の。

徳乃愛に比し。婦女乃懐小嗜やちど。まゝ氣の純功たるを以て
突とすへしや。きいへは八品。れを西きあれを穢。衣帯乃章と
那や亦も。紳を書はの透りて。人をて和悦やむ。かれは清浄此
器ありて。春心な後まの鳩寶なるぞ。

牟良珍曰前二篇蝶子之羨有_二扱_一テ患_二幸_一性_二頌_一ス山中不材之意_二

摸スニ似タリ全体托物真ニ詼諧ナル哉○後二篇ハ風俗ノ玩弄

ニ依テ正教ヲ説ナス結語春服ノ摸樣トナシテ曾點力志ニ同

ニウセリ禮ヲ知和シ貴_二此_一即楚國之寶幸_二我_一俳諧囊中

二入

俳諧而形集附録終

俳諧而形集附録續編

東都 解庵 皐月平砂 著

諸家發句 各從所見投之先後而為序次故

鶯 鶯が遊ぶの姿あり淡屋端 攬翠 帆風舎

春雨 春雨や宵乃軒を琴の上 其貝 五峰庵

夜鯨 此昼は醒しをまて夜鯨也 青泉 五峰庵

鉢扣 曉は香敷新也利鉢扣 木訥 青江舎

千鳥 鞘當小拍子のおまる踊り 冬翠 海隣舎

稻妻 水面吹ぬにちりおぬ衝也 龍成 錦蒲亭

いざよまに力のいづぬ月夜かち 帆里 錦蒲亭

阿ふ々二葉の月もも真夜を以て一帯銀乃
のふ兔来水十之夜来水六冬波を走らぬきり来水
何れ木平登家此對ありむや

活輕や瓦家のゆるるお此月

同

那和亥此夜旅行有来水お近江路まで来水腮さむり
樹披は夕鳥来水こきこ也又云湖水の睡室来水
うさあとかたれお望田の酒がと来水雪是るお是る
さわりをなふおるおさむをおりおるらと

日此前小存下り掃小室さか

同

は兼退戸 聖廟あゝの連袂を再建してより
あこくにありきりありと弄ふ

雲峰

敬咲や隣く雨戸にのみほ照

太申

櫻

言苑の真ハ也歌やを此峰

同

鎌倉の片
依り

おそるく人のちて来る揺ふ

在澄

暮春

いつさなく社残ゆり跡生山

駒水

葛

樹の猿お下陰ゆくお面来水の暮

同

晋子おさるるなろるるなろるる

歳暮

家の杵とおれ人を擡来水一良の併

律山

櫻

家搦人乃勤めし垣根来水れ

平節

凌霄

凌宵来水講又咲てほむ身

同

牡丹分根 牡丹く分根を殿乃由つら 土熊舎 同

雪 浅からぬ友訪来くち雪の香 同

おれおゆ 国傍り 秋の雲きつや押へ乃は糸 同

まのくハ尾を笠と有明 盧水

色加へぬ松を短ちるん雲の影小 同

蟲 ささひまの壺もあまて虫死寿 沖谷

寿再刻成 ひそやふはくろひすぬ菊圃 平砂

明和九年壬辰九月七日在日本橋通二坊上之宅書

俳諧而形集附録續編終 石井雨林刻

書俳諧而形集之後 

去年の友五日解庵を訪し主人翁舊時より

此を案の紐とまきていつく是古人の糟粕なり

年々合して酌酒し老来漸解るといへる餘臭

折残わかと予も酔語を思ひ笑て去ぬ相遇

おあたること茲より年餘終に醒しけむ行言偏

さす行を脱ぎり毎玉を拾ふことと教篇錦を

織ふことと一は未だ門の清君刊て行むことと

月八日行 万三集友

後予を又一刻の成を待てて。金本をとりて。入
摺配此変を定るといふ。是より此一帙を開きて。
方言の真をむむことを幸とす。よかつて。徳
併て賦と云。是跡の教よきわむ。雪此忽

明和八年辛卯冬十一月

萬里橋教人餘昔



俳諧而形集跋

交里哉。金と次るものハすくねし。
解庵主ハ予の忘年の友なり。ともに素弱
門不極ふ。お會すと記ハ他の話なり。
是を詠ふ。小句は主客を分つ。運氣哉論
す。り。如し。前不懸ぬ。小一字ハ交會を
う。ふ。經脈を察する。り。と。唯古人乃
長をさること。衆醫の經驗を用ひて。我家方
を立ゆ。り。不ひ。あり。言。交。予。旨と

